

# 文化財だより

## 第20号

— もくじ —

手漕ぎ船調査報告 (1) .....	1
手漕ぎ船調査報告 (2) .....	8
石巻市半島部の板碑 .....	30
旧町名表示石柱設置事業 .....	46
平成二年度文化財めぐり .....	47
文化財標柱・説明板設置事業 .....	48

石巻市教育委員会

## 手漕ぎ船調査報告 (1)

## 平成元年度

## 手漕ぎ船調査報告

石巻市文化財保護委員 鈴木東行

## 一 調査目的

沿岸漁業で伝統的に使用されてきた櫻船・網船・釣船は昭和45年頃から発売されたプラスチック製船の普及と船材の原本の入手困難とあいまって、その使用はまさに終焉期を過ぎている。また伝承者は毎年減少し、船大工も共同体を離れたり、職を他に転じている状態である。ここに緊急に伝統的手漕ぎ船について総合的な調査を実施し、保護・保存についての基礎資料を得る。

## 二 調査期間と調査者

## (一) 調査期間

調査地 平成元年10月17日より2月27日

## (二) 調査者

市文化財保護委員 鈴木東行

(1) 桃浦 現在手漕ぎ船一艘もない。  
 手漕ぎ船(接船)の造船  
 (話者 船大工後藤善七)  
 明39・3・29(生)

(1) 用材の調達  
 (2) 桃浦  
 現在手漕ぎ船一艘もない。  
 手漕ぎ船(接船)の造船  
 (話者 船大工後藤善七)  
 明39・3・29(生)

## 三 調査報告

## (4) 部材

スキ……杉  
 チリ……杉、松なんでもよい  
 トコ……松  
 設計図

手板に引くのは棟梁がする。

△ 調査期間  
 平成元年10月17日より2月27日

## (三) 調査地

桃浦・月浦・折浜・船浜

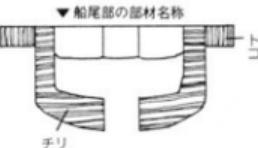
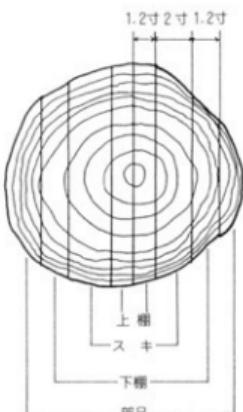
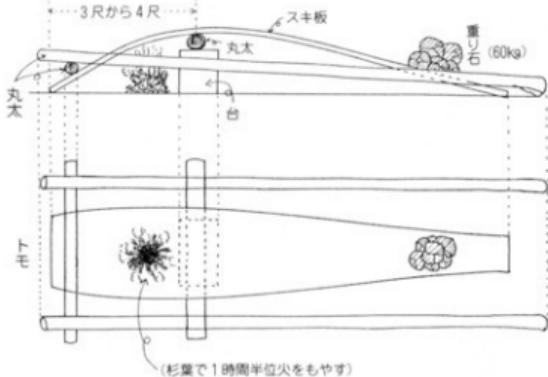
## (四) 調査者

市文化財保護委員 鈴木東行

## (5) 設計図

スキ……櫻木  
 チリ……杉  
 トコ……松、松なんでもよい  
 設計図

## ▼ 撫きだめ



## (6) スキの扱め方 (撫きだめ)

船大工が特に意を用いるのはスキをタメることである。操縦を容易にするため少し曲げるわけである。撫きだめと言つて

スキ板の一方を固定し、その端に60kgほどの重り石をのせて、火をたいて曲げていくのである。焼

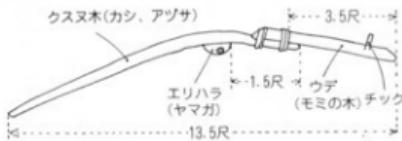
きだめをかけるのは、トコの方から3尺から4尺のところまでさすくらいため。(但しスキ20ft)

(注: 鮎とり船の場合スキをタメすぎると波

がバフバフとなり、氣泡になり、海底にいる鮎をのぞいているメガネ(ガラス箱)を曇らすので、あまりスキ

をタメない方がよい。)

◀ 木取り



- ・定置網の櫂は立派でなくてよい
- ・沖船の櫂は幅の広い赤ガシガ一番良い
- ・ヤマガのエリハラは一番良い

◆ 櫂 田

- (7) はぎ合わせ  
上櫂は船の深さによって2枚から3枚  
にし。  
中櫂には一番よい材料を用いる。  
・はぎ合わせの順序  
① スミサシでクジ引をする。  
② クジ引き通りにカンナをかけ  
する。(四の(3)(4)参照)  
③ 両方を木継ぐ。  
で叩き圧縮する)  
④ 両方をカスガイでとめる。  
ノミで穴をあけ、斜めに釘打ち  
する。

- (8) 外装  
ニラと言つて虫がつくのでコルターラを塗り、トモのトダテには各家の家印を焼刻で押したり、書いたりした。  
(注) ① 材料の代り出しと乾燥……3ヶ月  
② 船のできあがり……13日!  
14日、一人で朝5時より午後6時まで、  
夏。  
③ 手間賃はスキ20尺の船で、戦後20万円で請け負う。

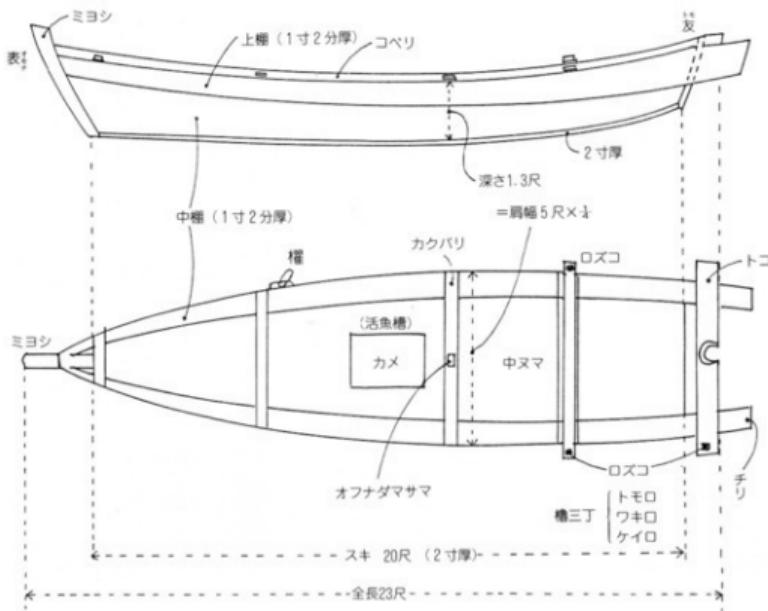
- (9) 船具  
(オモテヒトモヒ)  
櫂・櫂・舵・アカトリ・竿・カギ・網  
一 般の手間  
約10年間、雨が降った時はイタゴをはずして、すぐ塩水をかける。

- (10) 耐用年数  
西の磯崎の浜で造つた。今は船揚場のわざかなせでつづつっている。他の浜から作業小屋はなく、打瀬船を造つた時は、約10年間、雨が降った時はイタゴをはずして、すぐ塩水をかける。

- (11) 夏。  
夏。  
14日、一人で朝5時より午後6時まで、  
夏。

- 13 日!

「ワセソ」定式寸法  
(話者 船大工 後藤善七)



(話者 速藤善七)

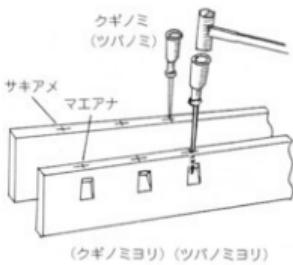
(3) 大工道具  
 を見るノミ)  
 (ヤッコノミは平ノミとも言つ  
 て「カシラキリ」と言つて船材  
 のはぎ合わせの時、釘頭の穴  
 を開くノミ)

(1) 修業	
① 年季奉公	(棟梁、鈴木留藏に弟 子入り) ..... 23歳
② お札奉公	..... 22歳
③ 独立	.....
④ 動力船導入のため	28歳の時、石
卷の山西・村上造船で	2年間修業
(注: 速藤善七氏のようによく浜で独立して造船に従事している職人もあれば、田代島仁平田出身の速藤四三男(現住所: 石巻市松原9-1)が、36・10・28生れ)氏の場合のように一人前になつても田代島大泊浜の大網の漁主、津田治七に帰属して網船(ダンペ、ドッキ)の修繕に従事し、大網漁がキリアガル(田丸月)と渡り職人として伊豆・伊東・陸中に出掛、かせきながら腕をみがき、旧二月のキリハジメに田代に戻つて仕事を従事する船大工もいる)	

## (2) 大工道具

(写真①~⑥参照)

- ① マサカリ
- ② 小バ
- ③ チヨンナ
- ④ 中バ
- ⑤ カンナ
- ⑥ フコギリ

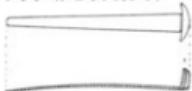


オトシクギ



(埋め込み機能を果たす)

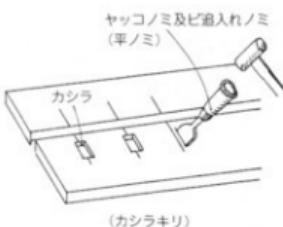
トウリ (チョウナガシラ)



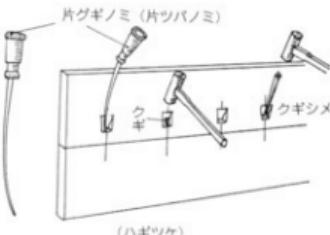
(カスガイと埋め込み機能を一本で兼ね備えたもの)

- より購入  
 ⑦ 片グギノミ (片ツバノミ)  
 渡波の鍛冶屋か石巻のハシジメ  
 ⑥ スミツボ  
 ⑤ 自由  
 ④ 鉄ヌキ  
 ③ 曲金  
 ② フナクギ  
 ① オトシクギ

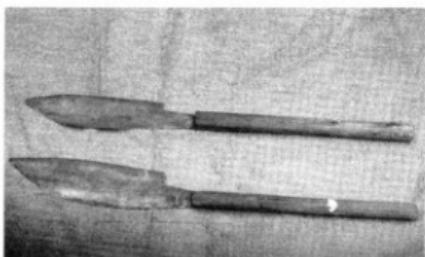
④ クギノミ (ツバノミ)  
 (船釘はそのまま打つと曲がってしまうので、あらかじめクギノミで穴を開けておく)  
 ⑤ 片クギノミ (片ツバノミ)  
 (はぎ合わせる板の双方にクギノミ (ツバノミ)で穴を開けた後、片クギノミで穴をあける)



(カシラカリ)

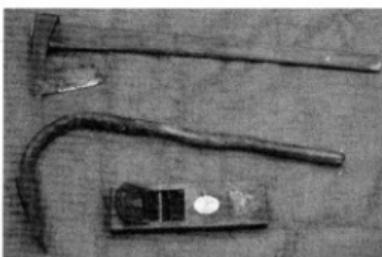


(ハギツケ)



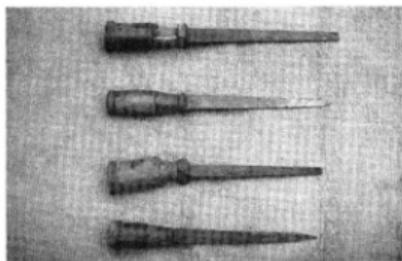
②

▲ 小バ・中バ



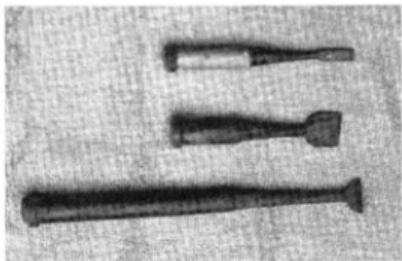
①

▲ マサカリ・チヨンナ・カンナ

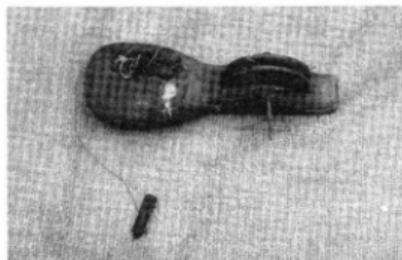


④

▲ クギノミ (ツバノミ)

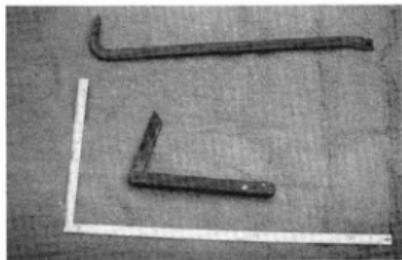


③ ▲ ツキノミ・1寸2分のヤッコノミ・ヤッコノミ



⑥

▲ スミツボ



⑤

▲ 釘又キ・自(由)金・曲金

漁場	種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	あわび わかめ、ひじき、いそのり	船の呼び名ない、2階棚型、スキ12尺(丈2)、羽幅4尺、深さ1尺-1.1尺、一人乗り 「ワセン」2階棚、2人乗り、スキ20尺-21尺、肩幅5尺、深さ1.3尺	漁主5人いたが、現在1人に権利を売った。ガラスをのぞき、カギでとる。 鎌の先に竿をつけ海藻を刈りとる。
地先	水晶型器械網(定置網) (このしろ、ふくらひ) (わかな、いわし)	「ワセン」2階棚、2人乗り、スキ20-21尺、肩幅5尺、深さ1.3尺、1艘	昭和10年頃まで、現在はツボ型定置網いわしは肥料とメザシ。
沿岸	モノ器械定置網 (小鰯、たつ魚)	同上 2人乗り、1艘	ゴザネ(竹をたばねた浮子)に網をつけた定置網、囲網は繩を使用。
沖合	縄ぶつ (いしなぎ、長さ3尺) (の高級魚、肝は薬)	呼び名「沖船」型…不明、10人乗り、スキ40尺、帆掛け八丁櫓、櫓なし	明治40年頃、田代・網長の沖のギラ(底根のある所)につく、縄(ナ)をあげる時、重いので「テッカ」を手にはめてひっぱり揚げた。
	堅一本釣	帆掛け	大正2年大シケで5艘のうち2艘沈没、操業しなかった。
	打漁網	「ミカワセン」(角帆)	田代沖(6月-9月)のギラにつく根魚、なまこを漁獲

桃浦の漁の種類・船の呼名・型・寸法  
(話者 後藤辰男、遠藤善七)

	漁の種類	呼び名・型・寸法	備考
磯	磯物とり (あわび、コツ突き) (カゼ、てんぐさなど)	「イソグリ船」、2階棚型、1~3人乗り、スキ丈1~丈3(1丈3尺)、肩幅3.5尺~4.5尺、深さ1.5尺	昭和63.3.23予備調査では、わかめとり「ワセン」、二階棚(「タナヅキ」)、2人乗り、丈物、あわびとり「イッケコ」、1階棚、シキ1丈(丈物)、肩幅3尺、高さ1.5尺
地	小網 (メガネ式落網 大正初期は大謀式 堅の餌の生き餌 肥料、メザシ用)	2體でおこす ①「ドエ」、ダンベ型、7~8人乗り。スキ21~23尺、肩幅5.3尺、4丁槽、4櫂 ②「タカ」、ワセン型(2階棚)、3~4人乗り、スキ18尺、2丁槽、1櫂、深さ2尺、肩幅5尺(部落3か紺)	大正初期まで3體でおこす。 ①ドエ②タカ③沖船ドエはダンベ型、タカと沖船はワセン型、夫水は婦女子、昭和15年、共同網やめ個人に貸しつける
先	定置網 (いわし、さば、青) (すずき、白魚)	「ワセン」、2階棚型、2人乗り、スキ16~18尺、肩幅4尺、深さ1.8尺	10年前まで5か紺あった
沿	蝶刺網	「ワセン」、タナヅキ型(2階棚型)、2人乗り、スキ16~18尺、肩幅4尺、深さ1.8尺、2~3人	3丁槽、櫂は使用せず。
岸	手縄網 (しゃこえび、かじか)	「ワセン」、タナヅキ型(2階棚型)、スキ(シキ)18尺、3丁槽	明治末~大正初め
	延縄網 (どんこ、すえ、はぜ) (すずき、はも)	「ワセン」、タナヅキ型、スキ15~18尺、肩幅4.2尺、深さ1.5尺	どんこ、すえ(根魚)…小縄、はぜ縄、すずき縄、はも縄と魚によって縄がちがう。
	こしき網 (なまことり)	「ワセン」、タナヅキ型、2人乗り、1人乗り、スキ15~18尺	少数のみ
沖合	鰐一本も釣簡	「ワセン」、2階棚型	金華山沖 田代、網地島沖

月浦 現存、手漕船一體、阿部武雄所有、現在使用中。昭和四一年五月進水。萩浜、齊藤正人造船。呼び名「コブネ」。二階棚型。磯物(あわび)・すずき縄など漁する。スキ丈3尺、深さ1.5尺、肩幅3尺、高さ1.5尺

## (二) 漁の種類・船の呼び名・型・寸法

(話者 阿部喜一大正10.1.3生)

(1) 昭和55年度の月浦の漁業習俗(東北歴史資料館)の調査で船大工新保吉太郎(大正9.2.1日生まれ)は「サップ」(二階棚型)は鹿渡半島の裏浜(特に江ノ島)で使用し、月浦では「ワセン」(タナヅキ2階棚型)を使用していると

言っていたが、今回の話者阿部喜一(大正10.1.3日生まれ)も二階棚型は波

(2) 昭和13年頃までヤキダマ式動力船が一般化していた。昭和30年代、ディーゼル・チャッカが普及し、センガイ機、プラスチック船の導入は20年前からである。木造船は風に対する抵抗力があり漁によるが、ニラ(虫が船につく)で穴があ

が荒いため使用したがらないと言ふ)とある。

理に金がかかり、又、プラスチック船より金額(スキ丈3尺)が高い。



▶ プラスチック製船・月浦



▲「コブネ」2階棚型 砲船

月浦 阿部武雄 所有



▲「タナヅキ」二階棚型 網船  
折浜 亀山 勝 所有



▲「イッケコ」刺網船（シャコエビとり）  
折浜 平塚子之吉 所有

(一) 折ノ浜  
現存 手漕船四艘 竹沢開前網浜  
平塚子之吉 (二) 所有、湾内で  
シャコエビとりの刺網船として使  
用、「イッケコ」(写真⑨参照)



▲「イッケダナ」スキ丈3 深さ1.4尺 破船  
折浜 亀山 勝 所有



▲「イッケッコ」1階棚型 スキ丈3 肩幅4.5尺  
深さ2尺 破船 折浜 四野見芳吉 所有

(二) 亀山巣所有。破損、腐朽。  
「タナヅキ」(二階棚型)  
(写真⑩参照)

漁場	漁の種類	呼び名・船の型・寸法	備考
磯	あわび (カギとり)	「カッケダナ」、1階棚型、1人乗り、スキ丈3、深さ1.4尺	船大工は桃浦の後藤善七、袋谷地相沢大工 (話者による)
	わかめ	同 上 2人乗り	カマに竿をつけ刈り取る
地	水晶型器械定置網 (いわし、鰐の餌用)	「タナツギ」、2階棚型、2人乗り、スキ19.5尺、肩幅6.5尺、深さ1.7尺 呼び名不明、10人乗り、スキ23~24尺、肩幅9尺、深さ2尺、檣4丁~5丁、櫂4丁~5丁	シック大工が造船 漁場は小竹~折浜の中間。 組織~漁主 ↓ 船員 - 船頭+水夫+女
沿	筒伏定置網 (ねう、どんこ、はもの青)	「イッケコ」、1階棚型、スキ丈3、肩幅4.5尺	船揚場は竹沢開前網浜 (浜の東端) 造船は西の真浜

(三) 四野見芳吉 (大正1~12年)  
生所有。収集許可。祝田の阿部  
造船でつくる。「イッケコ」  
スキ丈3。肩幅4.5尺。深さ2  
尺。鮪漁、延縄、定置網に使用  
(写真⑪参照)

(四) 亀山巣所有、現在使用せず。石  
巻市袋谷地・相沢大工造船、「イッ  
ケダナ」  
スキ丈3。深さ1.4尺  
(写真⑫参照)

① 桃浦、月浦と比較し、磯船・釣船に「イッカイダナ」(1階棚型)の利用が目立つ。

旧暦月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
漁の種類	うけぐり網 ハゼ	うけぐり シャコエビ	うけぐり (カレイ)	ひらめ繩 (金華山沖)	「タナヅキ」二階棚型 こしき網 ナマコ	「タナヅキ」二階棚型 テングサ	アワビとり (特定の人)					

(1) 戸数と漁船数 (昭和10年代)  
 戸数 15  
 漁船数 「タナヅキ」二階棚型 7 艘  
 ハゼ 5 艘  
 シャコエビ 5 艘  
 カレイ 3 艘  
 (2) 漁期  
 ハゼ 7 艘  
 シャコエビ 5 艘  
 カレイ 3 艘  
 ハゼ 5 艘  
 シャコエビ 5 艘  
 カレイ 3 艘  
 (3) 機械船 (沖の繩ぶつ専門)  
 帆船  
 大工工事  
 桶浦出身の大山造船  
 (4) ひらめ網漁 (大山惣助)  
 「タナヅキ」三人乗り、二丁櫓。  
 「タナヅキ」一階棚  
 「イツケフコ」一階棚  
 「スカ」太さ5尺、幅5尺、深さ2尺  
 帆かけ、二丁櫓。櫓2丁。  
 帆大工工事  
 桶浦出身の大山造船  
 現在、手漕ぎ船、一般もない。

(1) 現在、海上で使用している手漕ぎ船は月浦の一般のみで、折浜の四艘は浜にあげられて、腐朽を待つ運命にある。  
 収集許可された一般を市で緊急に確保しておかべきである。  
 (2) 月浦、桃浦は磯船、櫻浦は船頭のあわい船は丈2。網船とわかれどり船はスキ二〇尺が主流をなしている。  
 折浜は前者に比較して磯船、釣船も「イッカイダナ」一階棚型の利用が目立つ。  
 始浜は地先沿岸に定置網を利用した所がないため、地先沖を流し航行するウケグ

きで、丁に帆をかけて、カメ(活魚槽)にイワシを活けて、朝2時船出。12時に目的的、金華山沖に着く。夜漁。3日間位漁をし、浜に帰ってくる。  
 料水を入れ、石油カンのクドで煮炊きして食事をとり、鮎川港に入港し、石巻に行く巡航船に魚をおろす。三

## 四 調査結果から

(1) 昭和51年の宮城県民族資料緊急調査では、田代・小淵・江ノ島で磯船(特に施カギとり)、定置網船にカツコー(くり船)から発達した準構造船を使用したと伝承者は語っている。今回は採訪するところが出来なかつた。  
 準構造船の伝承者の見聞と文献資料の発見にもそくべきである。  
 四 船大工の分布については南は小網倉を中心としたグルーブ、萩浜・月浦、桃浦グルーブ、石巻祝田のグルーブと石巻市内があり、今回の調査では各浜の漁師は必ずしもグルーブに左右されないで船を注文し造船している。

(2) 三陸海岸地方の船大工に「一寸情」という言葉がある。それは基本的な一寸の差が(スキ)の船形に決定的な変化を与えるという意味と解釈されるが、それぞれの分布地域に固有の船型が存在するということである。特に漁船は漁浦より漁場までの航行用具であるとともに、構造場にあっては作業場であり、船型や構造は漁場の自然的な様相と漁種に即応し、主材の強度と帆走を含めた人力による滑力、さらに船上作業上での人体との調和などの諸条件によって、長い年代にわたる経験により改良が重ねられたものである。

## 手漕ぎ船調査報告 (2)

### 平成二年年度

#### 手漕ぎ船調査報告

石巻市文化財保護委員 鈴木東行

一 調査目的 前年度に同じ。

二 調査期間と調査者

(一) 平成二年七月四日より一月八日

調査地 祝田浜・萩浜・福貴浦・鹿立・孤崎・竹浜・牧浜・仁斗田浜・大泊浜。

(二) 調査者 石巻市文化財保護委員 鈴木東行

(三) 調査報告 祝田浜

(一) 現在、手漕ぎ船は一艘もない。

(二) 船大工と接船の造船について。

(大正2・11・19生)

・系譜と修業 津田國蔵→父阿部忠之丞→忠雄→善雄

・修業 渡波尋常小学校を卒業と同時に父忠之丞の内弟子になる。親子の仲と雖も、仕

事については厳しかった。「人の仕事を見て、覚えよ」と言って、手をとつて教えたことは一度もなかった。

父は「自分で小船を造れる位だったら、一人前だと語った。その後、女川

では20歳頃であった。昭和八年(二十二歳)、女川町江の島から嫁を迎えた。そ

れが縁で、後で江の島のサッパ(磯船)を手掛けることになった。その後、女川の阿部慶三郎造船 石巻の造船所で動力

・造船の造り方について修業した。

昭和13年(二十六歳)で、父から独立して、船主のいる浜に行つて場所を借りて船を造った。(注:職人は居職と出職あり、この場合、出職に当たる)

手掛けた磯船は万石浦の櫛ガキ用ダンベ、佐須浜の小船ヨロコ・小竹方面のイケコ・江の島の鮒取りのサッパなどである。

昭和45年(四十七歳)現在地(祝田浜字祝田)に落ち着き、造船場をつくり、息子善雄と半島の漁師の機械船の注文に応じて、今日に至っている。

(2) 大工道具

・道具(製材)の道具 (大正2・11・19生)

・系譜と修業 (大正2・11・19生)

・修業 (大正2・11・19生)

・木挽鋸(前挽き) (大正2・11・19生)

ネノコ。(写真1・2参照)

▲写真1 木取り(製材)の道具  
①木挽鋸(前挽き)

船釘をそのまま打つと曲がってしまうので、あらかじめツバノミでハギジに穴をバノミとゲンノウであける  
ツバノミ  
船釘を打ち込むハギジに前穴・先穴をバノミとゲンノウであける  
(写真7・8の③④⑤⑥) 平成元年報告書の図参照されだし)

▲写真3 船材を加工する道具  
①チャウナ(上)  
②マサカリ(舟)(下)



▲写真2  
②ヨコギキ(左)  
③メガネノコ(横に切る)



▲写真4  
左①オオドシン(大きな船の船板用)  
右②ヨコギリ(船材を加工する道具)

・スリ合せ用具  
左①オオドシン(大きな船の船板用)  
右②ヨコギリ(船材を加工する道具)

・船板の接合せ作業具  
左①墨つけ用具(ツボカネ)

②墨つけ(ヨコギリ)

③墨ノコ(万能鋸)

▲写真3 木取り(製材)の道具  
①木挽鋸(前挽き) (大正2・11・19生)

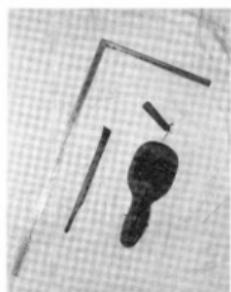
▲写真4 オオドシン(大きな船の船板用)とヨコギリ(船材を加工する道具)



▲写真5  
ツバノミ(木挽鋸)  
ツバノウナ(マサカリ)

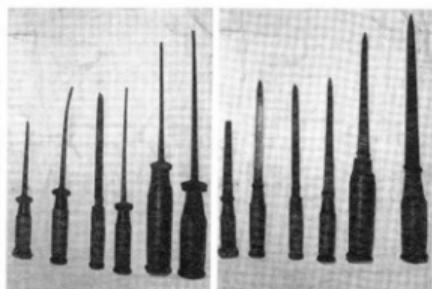


▲写真6 「スリアワセ」の道具  
上から①②③…小歯（仕上用）④⑤…中歯



▲写真5・  
ツボカネ

- ①曲金
- ②墨サシ
- ③墨ツボ



▲写真7・8  
成元年報告書の図参照、平  
穴合せ用具  
左より①②片ツバノミ  
（①は先が折れた）  
・ツバノミより道具  
③④⑤ツバノミ  
（船釘を打ち込む穴を開ける工具）

▲写真9  
穴合わせの板の双方にツバノミで穴を開けた後、片ツバノミで穴合わせをする  
片ツバノミ

▲写真9の⑤⑥参照  
釘シメ。ゲンノウ。  
（写真9の⑤⑥参照）



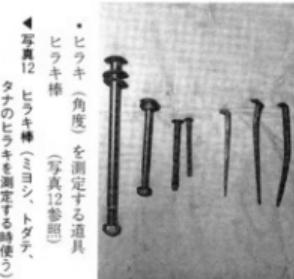
▲写真10  
船釘とボルト  
タック  
…船のろつ骨（マツラ）を止める  
（写真10・11参照）



▲写真9  
ハギツケ道具  
左から④…カスガイ  
…オトン釘  
⑤釘シメ  
…釘を打つ道具  
⑥ゲンノウ



▲写真13・14参照  
マキハダ。  
（マキハダ。ウチコニ。）



▲写真12  
ヒラキ棒（ミヨシ、トダチ、タナ）  
タナのヒラキを測定する時使う

▲写真11  
船釘とボルト

▲写真13・14 マキハダを打つ道具

(ハガ合せた板のすき面から水が漏れないようにマキハダをつめる道具)

左より①(カチコミ)

②ナラシ(マキハダ用)

④ホーコン(ホーコン油つけた麻)

⑤口開けヤットコ

⑥マキハダ(樽の中の皮でできている)

(3) 造船工程

がシキをとる。平成元年の報告書参照

▲写真5 小竹「イツカイダナ」

手板(実物の1/10の設計図)

昔は船主が自分の山の木で用意したが、船大工の請負になり、木挽を山に連れていき、用材になる立木を自分で選定し、現場で木挽に船板(ケイゴ)を挽かせた。

最近は製材所に行って選定し、船板の製材を頼む。

伐り出しは山の神に御神酒を上げておがみ、それから作業をはじめる。伐り出しが拌ひのが例だが、依頼人が拌む場合もある。

・主材 シキ(スキ)の長さ18尺5寸のサッパ(女川町江島)の場合、一般の杉材の石数は5石である。石数の単位は丸太で径1尺×長さ10尺である。

注…スキ(スキ)は船底で船の長さを言ふ場合の基準である。

・原本から船板へ(木取り)

一本の原木からとった板の使い分けは左図の通りである。

良質杉材、年輪四〇年~四六年(普通八〇~一〇〇〇年経たものが良材である)

注…杉材が良ければシキは、芯部からとるが、普通は芯部は糊でその両わき

船板(ケイゴ)は製材してから一ヶ月、ただ差べ立てで乾燥したり、ハセ契けにして乾燥したりする。

節には「生き筋」と「死に筋」がある。生き筋は船板にしてもアカ(海水)が入らないので、そのまま使い、死に筋は、そのまままで使えないで抜いて新しく埋木をする。赤味のケイゴをアカダと言い良質、白味のものをアマと言い駒や

注…白味のものをシラダ、外側をアマと言つてある地方もある。

・設計図 杉の板に实物の10分の1の縮尺で書いたものを「手板」と言う。棟梁が書く。トモを左むきに、スキ(スキ)の形取りも綱などを結ぶ桂)など逆木でもかまわない。櫛である。

逆木(ナバリ)・檜(ヒノキ)・松(マツ)・シキ(スギ)・柏(ヒバ)・松(マツ)・クヌギ

木(ミヨシ)・檜(ヒバ)・松(マツ)・シキ(スギ)・柏(ヒバ)・松(マツ)・クヌギ

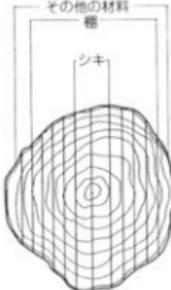
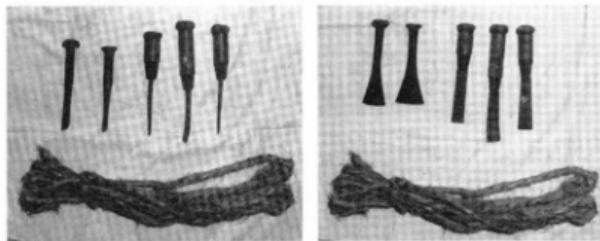
・定式寸法

① 縦尺30分の1の定式寸法

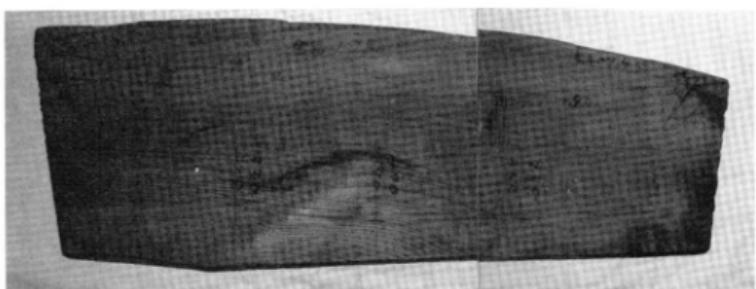
(図1・図2)

作図者…阿部忠雄

小竹イフカイダナ
シキ長………15尺5寸
シキ幅………3尺7寸
深サ………1尺4寸



シキ  
シキ長………15尺5寸  
シキ幅………3尺7寸  
深サ………1尺4寸



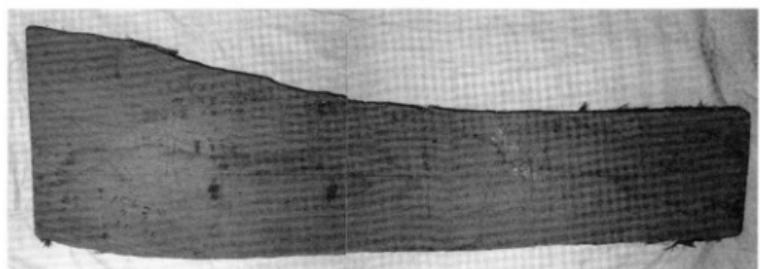


写真16  
江ノ島サツバの手板  
(1-10に縮尺した底計図)

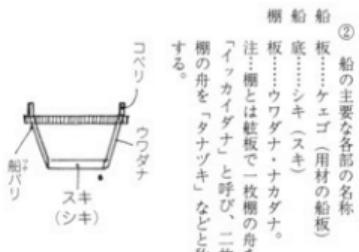


図1-2  
シキの型取り (参考)

(七寸キ) (7寸の場合)

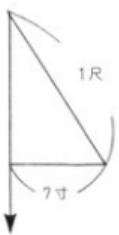


② 船の主要な各部の名称  
船板……ケエゴ (用材の船板)  
船底シキ (スキ)  
棚板……ウワダナ・ナカダナ。  
注: 棚とは船板で一枚棚の舟を「イッカイダナ」と呼び、二枚棚の舟を「タナツキ」と称する。

③ カシラ切り  
船釘の頭がうまる穴をハギ地にシ  
バノミ (平ノミ (ヤコノミ)) で  
彫り、細ノミで掘り込む。

④ ツバノミより  
ツバノミをゲンノウで叩き、ハギ地の両方に船くぎを打ち込む穴を開ける。

⑤ スリ合わせ  
板のつなぎ合わせる面 (ハギジ) を、最初、2回位、中傷刷で擦びきし、だんだん間隔がせまくなってきたとき、小歛で仕上げる。



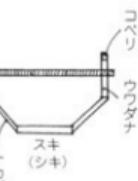
(七寸キ) (7寸の場合)

ミヨシのヒラキ……7寸  
トダテのヒラキ……6寸  
女川町江島サツバ  
シキ長……18尺5寸  
深サ……1尺8寸  
シキ幅……3尺8寸  
ミヨシのヒラキ……7寸  
トダテのヒラキ……6寸  
注: シキの型取りは図1-2を参照

図は折ズミでヨコズミの上になっている。ヒラキとは角度(斜角)で1尺に対しても何すという。

ミヨシのヒラキ……7寸  
トダテのヒラキ……6寸  
女川町江島サツバ  
シキ長……18尺5寸  
深サ……1尺8寸  
シキ幅……3尺8寸  
ミヨシのヒラキ……7寸  
トダテのヒラキ……6寸  
注: シキの型取りは図1-2を参照

図は折ズミでヨコズミの上になっている。ヒラキとは角度(斜角)で1尺に対しても何すという。



タナを受ける梁  
船バリの下に入る板  
ウワダナの上縁に取  
りつける補強材  
トモの槽と舵を掘え  
る台木  
シキ板  
トコ (床) 子 (板子)  
ナカダナ  
スキ (シキ)

タナを受ける梁  
船バリの下に入る板  
ウワダナの上縁に取  
りつける補強材  
トモの槽と舵を掘え  
る台木  
シキ板  
トコ (床) 子 (板子)  
ナカダナ  
スキ (シキ)

スリ合わせをした面をゲンノウで叩く。  
注: 場所によっては木ごろしを先にする。板はどんなに上手につないでもカンナ合わせではアカ (水) がさしてくる。目の細かい鋸で「スリ合わせ」をし、木ごろしして、はじめてアカが止まる。

スリ合わせをした面をゲンノウで叩く。  
注: 場所によっては木ごろしを先にする。板はどんなに上手につないでもカンナ合わせではアカ (水) がさしてくる。目の細かい鋸で「スリ合わせ」をし、木ごろしして、はじめてアカが止まる。

スリ合わせをした面をゲンノウで叩く。  
注: 場所によっては木ごろしを先にする。板はどんなに上手につないでもカンナ合わせではアカ (水) がさしてくる。目の細かい鋸で「スリ合わせ」をし、木ごろしして、はじめてアカが止まる。

① はぎと合わせ  
板のつなぎ合わせる面にカンナがけをする。  
② 墨つけ  
船くぎを打った穴を決めるためスミツボ・スミサシ・曲金を使い印をつける。  
③ カシラ切り  
船釘の頭がうまる穴をハギ地にシバノミ (平ノミ (ヤコノミ)) で彫り、細ノミで掘り込む。

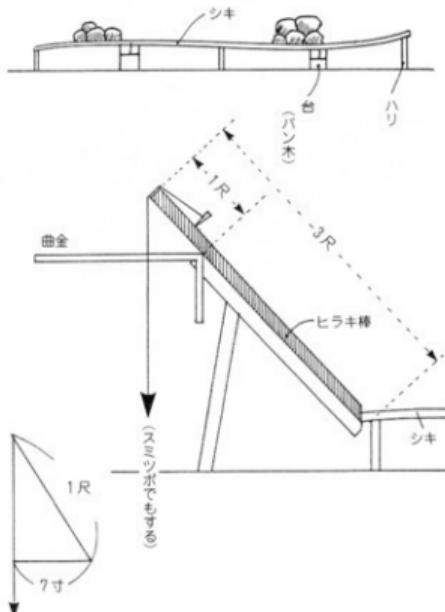
④ ツバノミより  
ツバノミをゲンノウで叩き、ハギ地の両方に船くぎを打ち込む穴を開ける。

⑤ ハギ付け  
板をつなぎ止めるために、船釘をクギジメをさし込みゲンノウで打つ。埋め木

船釘の打ち込まれた穴に理木をする。

注: スリ合わせ面に漆を塗った人もあるが、自分はまるので、あまり使用しなかった。

釘間……オトイ (ヌイ) 釘の場合、  
・トワリ釘は5寸間 (スキとウワダナのハギ合わせ)  
・コベリをとめる釘はカイオ  
リ釘で間は1尺1寸。



・ シキの「焼接め」  
乾燥したケイゴ（船板）ほど接めが早く、スキ長一八尺五寸のサッパの場合はモモで四、六尺で7寸から7寸5分たどる。ため場所には目張り、水をかけ、約2時間、杉葉をもやす。スキは丸太で固定され、端のスキの上に重り石をのせる。

注…平成元年報告書の焼接めの図を参照。

定の反りにしてハリで支え固定する。

測定する。

・ 横…江島サッパ

（カシは原城、岩手からアツサの橋がくる）

・ タナの取りつけ  
小竹イッカイダイナ（シキ長15尺）

① タナのヒラキを測定し、取り付け

（トモの）

（トモの）

（トモテ…8寸3分

トモテ…9寸8分

② スキとタナの取り付け  
釘はトウリで釘間は5寸で打った穴にバテーを埋める

・ コベリの取りつけ

江島サッパ（シキ長15尺）

コベリはミヨシ方向を元本にし、木の曲がりによって、釘間1.5尺から2尺にする。

コベリの釘はカイオリで取り付ける。

カイオコは一つだけカメからトモの

方向1.5尺から2尺の間に取り付ける。

口ネコは江の島サッパでは内側につけ

ず、ナバラからトモの方向1.5尺から1.4

尺の間にとりつける。コベリの下に化粧板をつけて穴を開け、ハヤオ（ハヨ）を通す。

（図2・参照）

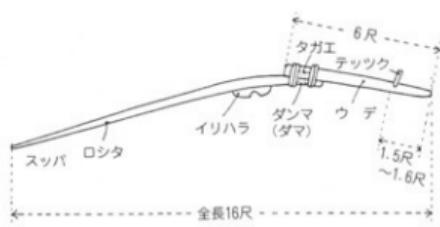
・ 外装  
ロドコ（床）は松を用いるか桧で、腐れに強い部材が用いられる。トリカジ側に口ベソをつけ、昔はコールタール、今は青ベニキ、下は赤（ドクチヤン）を塗った。

① 横…江島サッパ用  
横・縦・舵・アカトリ・竿・カギ・沖  
箱・網（オモテとトモに）  
② 横…江島サッパ用  
江島で磯物とりにはメリガイ用いられた。沖箱は屋大工がつくり、アカトリは杉材。

江島で磯物とりにはメリガイ用いられた。沖箱は屋大工がつくり、アカトリは杉材。

・ 一般の手間と造船場所  
手間は一人工で15・16日。昭和45年以降は作業小屋で、独立時代初めは船主の庭を借りてつくる。

・ 耐用年数  
約12年から13年で、雨水にうれたたら、板子をはずして、すぐ塗をかけると長持ちする。



・ 口の本体…カシ、アツサ  
（カシは原城、岩手からアツサの橋がくる）

（トモテ…8寸3分

トモテ…9寸8分

② スキとタナの取り付け  
釘はトウリで釘間は5寸で打った穴にバテーを埋める

・ コベリの取りつけ

江島サッパ（シキ長15尺）

コベリはミヨシ方向を元本にし、木の曲がりによって、釘間1.5尺から2尺にする。

コベリの釘はカイオリで取り付ける。

カイオコは一つだけカメからトモの

方向1.5尺から2尺の間に取り付ける。

口ネコは江の島サッパでは内側につけ

ず、ナバラからトモの方向1.5尺から1.4

尺の間にとりつける。コベリの下に化粧板をつけて穴を開け、ハヤオ（ハヨ）を通す。

（図2・参照）

・ 外装  
ロドコ（床）は松を用いるか桧で、腐れに強い部材が用いられる。トリカジ側に口ベソをつけ、昔はコールタール、今は青ベニキ、下は赤（ドクチヤン）を塗った。

① 横…江島サッパ用  
横・縦・舵・アカトリ・竿・カギ・沖  
箱・網（オモテとトモに）  
② 横…江島サッパ用  
江島で磯物とりにはメリガイ用いられた。沖箱は屋大工がつくり、アカトリは杉材。

江島で磯物とりにはメリガイ用いられた。沖箱は屋大工がつくり、アカトリは杉材。

(一) 現在、手漕ぎ船は一種もない。木造動力船は二艘ある。

〔二〕 船大工と接船の造船について

話者 船大工 齊藤正人(大正4年3月25生)

(1) 系譜と修業

後藤豊吉(十八歳の伯父)→齊藤清(十八歳から独立して萩浜へ)→齊藤正人(兄と20歳下)→守男(甥)死(亡)

・ 修業

鮎川の高等科卒業から兵隊検査まで、兄の造船所(萩浜)で修業した。兄は五人位の弟子をもつていた棟梁であった。兄から甘い言葉は一度もかけられず、他の弟子と同じようにきびしく技術をしこまれた。

道具箱をかついで新山・泊・寄磯・月浦と兄弟子たちとダンナ殿(船主)の家に宿泊し、庭を借りて注文の船を造った。軍隊から帰ってから昭和一年(一二歳)から昭和五年頃(二七歳)まで、石巻の山西造船所・志津川の高橋造船所・気仙沼の本田漁港部・静岡県清水市大万造船と大型船建造の勉学に励んだ。

昭和一七年(二九歳)、応召。満州の関東軍、南方のフィリピン、ニューギニア、ジャワ島と転戦し、工兵として船の修理に従事した。

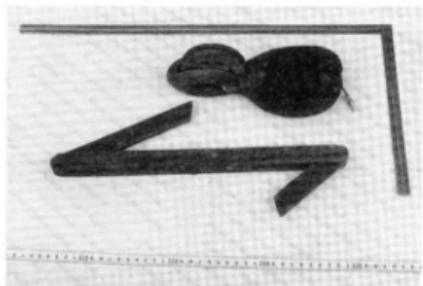
・ 独立

戦後、帰国、32歳で独立した。現在まで手漕船・動力船をつくめて一〇〇艘ほどの建造に携わった。造船場は組合の脇の船着場の近くに設けた。

(2) 船大工道具

(写真17-25、参照)

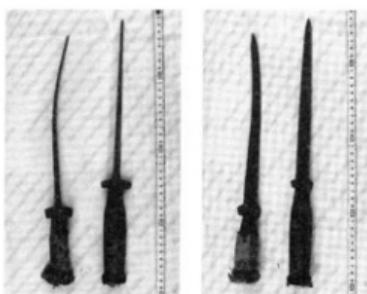
▲写真17 船材を加工する道具  
チョウナ マサカリ



▲写真18 売つけ用具  
上から①曲金  
②スミソンドリ



▲写真19 左から①曲金  
②スミソンドリ  
③自由金  
④小箆ノコ(仕上げ用)



▲写真20・21  
①左:片ツバノミ(穴合せ用)  
②右:ツバノミ(クギノミ)  
(船釘を打ち込む穴を開けるノミ)



▲写真22・かじら切り道具  
①四分ノミ②Sノミ(タメキリ)で切つたのをねじ形つくるのみ...オハイレーベン  
③オオドシン(一番はじめに引く)  
④半ノミ(かじら切り「タメキリ」...)  
⑤半ノミ(かじら切り「タメキリ」)...  
船釘の頭がうまる穴を挖る道具)

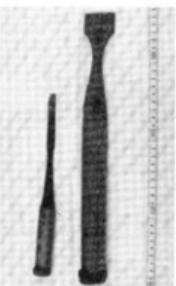


写真24・銘鑄  
左上から①仕上げ鉛  
②中す鉛  
③裏鉛(ハギ合せ用)  
④マル鉛(田い次の中をけざる)  
⑤ソリ鉛(凸凹がある場合使用)

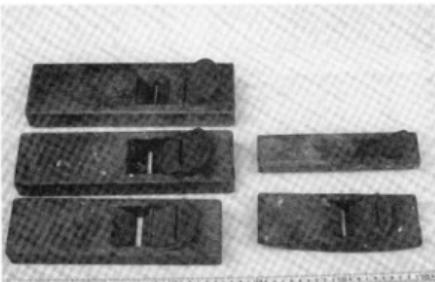
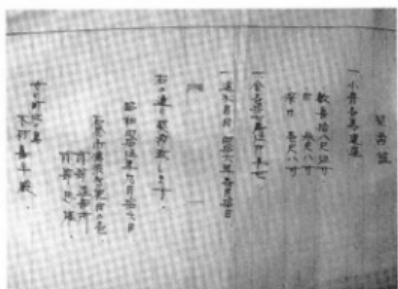


写真25 右の④⑤の背面

写真26 横船置様



写真27 船の契約書



(3) 造船

戦前は船主にまかせ、伐るのは木挽がする。木挽が山で船板にひく。山からの運搬は山ご二人でかついでくる。

戦後は船大工が製材所前に行つて、木の曲がり具合を見て用材を選定し、船板

(ケイゴ)にしてもらう。

・ 主 材 杉、スキ長二〇尺のタナヅキで、直径、裏で八寸から七寸の杉の木三本、スキ用材の木は直角な木がこのままで、ナカダナは

ばかりの良い木がこのままで、スキ一本、タナヅキ二本分ということになる。生の荒木

よりも良材とした船材は早くて3年、半年は乾燥

させる。

- ・ 部 材 ミヨシ・ヒラキ
- ・ 定式寸法表

定式寸法表

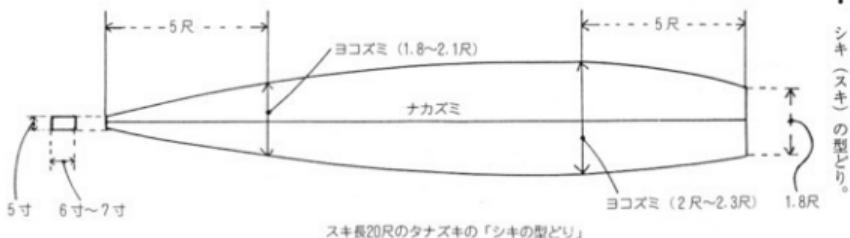
シキ長	20尺	18尺	13尺
最大幅	6尺	6尺	4.5尺
深さ (シキからコベリを除く)	2尺	2尺	1.5寸
シキの厚さ	2寸	1.8寸	1.5寸
上棚の厚さ	1.2寸	1寸	1寸
ナカ棚の厚さ	1.2寸	1寸	1寸
トダテの厚さ	2寸	1.8寸	1.5寸
ハリキリ	2寸		
ミヨシのヒラキ	7.5寸	7.5寸	7.5寸
トダテのヒラキ	5寸		

床 ..... 松  
マツラ(船の骨) ..... 樅  
逆木 ..... ミヨシ・カジ・タフはケヤキで逆木でよいとされて

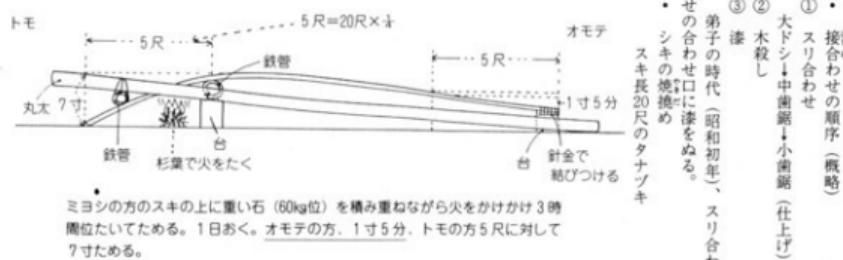
たもので、これを「手板」と言う。  
ミヨシを左に折ズミのスキの型取りを記入、船の大きさの基準になるスキ長、幅・深さ・ミヨシ・トダテのヒラキを墨入れする。

杉の板に、実物の10分の1に縮尺されたりして、これを「手板」と言う。  
ミヨシを左に折ズミのスキの型取りを記入、船の大きさの基準になるスキ長、幅・深さ・ミヨシ・トダテのヒラキを墨入れする。

① タナヅキ(一枚櫛)の寸法表  
注:スキ長20尺・18尺のタナヅキは主として(延)繩ぶら用。スキ長13尺は磯ぐり船と称して、鮫漁などに使用した。

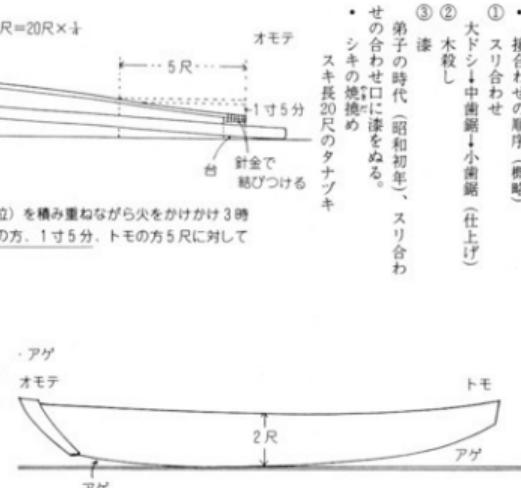


・ シキ（スキ）の型どり。

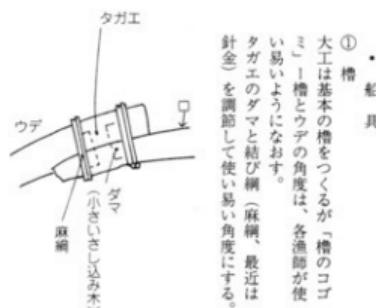


ミヨシの方のスキの上に重い石(60kg位)を積み重ねながら火をかけかけ3時  
周位たいてためる。1日あく。オモテの方、1寸5分、トモの方5尺に対して  
7寸ためる。

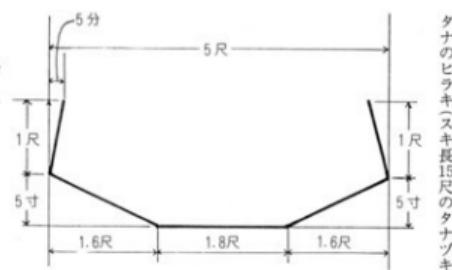
・ 撥えられ、スキに当てて型取りする。鉛  
で仕上げ、釘間5寸にしてスキに取り付  
ける。二枚板の場合、前後のヨコズミで  
ヒラキをし、取り付ける。  
・ 棚の取り付け  
棚板の厚さ1寸をオモテを元木にし、  
ヒラキをヒラキ棒で測り、ミヨシ・トダ  
テをスキ（スキ）に取り付ける。

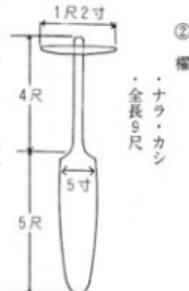


アゲ(反り)は浜によってちがう。荒海は前アゲが高く、  
萩浜は荒海でないので低い。アゲが表とトモの同じ高さの場合もある。



① 構  
大工は基本の構つくるが「構のコゴ  
ミ」一構とウデの角度は、各漁師が使  
い易いようになおす。  
タガ工のダマと結び綱（麻綱、最近は  
針金）を調節して使い易い角度にする。





- ② 樽  
・ナラ・カシ  
・全長 9 尺
- ・船おろしの儀札
  - 夜八時から九時の間に、風呂に入つて身を清め、夜半一時頃、ダンケと棗染が新造船のカヌメのフナバリに穴をほつて、お船靈さま——サイコロ 2 個・一二文の硬貨・人形ビナ一組——をサイの目神酒にあつた祝言を唱え、御神入れをし、御神酒をあげ拌む。
  - 次の日、船のお船靈様に供え物——お供え餅・松の木の重箱・米一升・シテゲ・繩節豆・コンブを箸で三つずつあげて拌る。(写真 26 参照)
  - ※注 天一地六表達裏幸取舵五臘思
- 〔二〕 萩浜の漁種・漁場と船型
- 話者: 藤原喜和男(昭5.11.12日生)  
菅野三代五郎(大5.11.23日生)  
齊藤正人(船大工)
- 〔大4.3.25日生) (大4.3.25日生)
- 富貴浦 舶荷押
- 者: 平塚嘉助(明41.4.15日生)  
飯塚善之助(大6.3.2日生)  
阿部留治(大1.11.20日生)
- 「ドツキ」はくり舟で準構造船である。大正末頃、瀬主が自分の家の山から大木杉丸太を伐り出し、富貴浦

漁場	種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	・あわびとり ・なまことり ・てんぐさ	「タナヅキ」、2枚棚、スキ丈2~丈3、肩幅(内り)4尺~4.2尺、深さ1.5尺、1人乗り	カギ、メガネ(箱)、ネリガイすもぐりで、テングサカギである。
地	・カジカ網(湧から燈台) (旧9月~1ヶ月朝うつ 旧10月~12月…日ぐれにかけてうつ)	「タナヅキ」、スキ丈3~丈8 肩幅 丈3、丈5……4.5尺 丈8……5.0尺 丈3……1.5尺 丈8……1.8尺 深さ 丈5……1.7~1.8尺 2人~3人乗り	船は船主の注文によって異なる。 昭和30年代で終了(→カキ棚の進出)
先	・ナラッパ(鰻とり)一夏	同 上	
沿	・水晶型定置網	同 上	
岸	鰯、ぶり、すずき、 あじまぐろ(夏)	スキ、丈8~丈20、肩幅5.5~6尺、深さ2尺、口、カイ、1人乗り	大型(父の時代)
	・カキツミ	「タナヅキ」、丈20尺~23尺、肩幅6尺、深さ2尺~2.1 or 2.2尺、口カギ、1人乗り	昭和30年以降

・和船は齊藤正人の父と正人と月浦の新保大工と侍浜の大工が造船。人のこのみでちがう。

・口(櫓) [スキ長 丈3尺 ← ロの本体 11尺 + ウデ (カシ(九州)  
丈8尺 ← ロの本体 13尺 + ウデ (アツサ(八戸、岩手))]

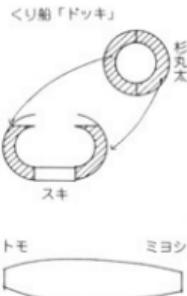
・昭和の初めまで、大型定置の小網……湧に1つ、燈台の沖に1つ、ダンペ船

浜で岩手ケセンの大工が来て約一ヶ月かけて造った。

話者平塚嘉助

(明治41・4・15日生)

侍浜の船大工杉浦勇吉の祖父に  
齊藤正人(地元萩浜)、大原のシ  
ナヲ大工(一回)にも手漕ぎ船を  
造ってもらう…計五艘



話者阿部留治

(大正11・11・20日生)

祖父が生きていた頃十八成の大工カオル大工に造つてもらう。

萩浜の船揚場は小田浜で、船の修理も船大工を呼んでしてもらつた。淨化、乾燥、外装(虫よけのコルタール塗)もした。フナタテ(虫や草の淨化)青杉葉でゆぶすーもした。

マンナオシ:不漁の時、船を浜に曳きあげて、法印さまに拝んでもらつた。  
アンバサマ:安波さまの掛け軸あり。秋葉山、金比羅山の石碑のある一区画をアンバサマと称して、大漁祈願の場としている。

大漁祈願の場としている。  
大漁祈願の場としている。

漁場	種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	ふりひじかんぐさたこ	ポート(ナカダナ、タナヅキ) 兼用 兼に竿をつける 竿と石ヤリ……	小さい船はすべてポートとよぶ。 イッカイダナ使用しない。 春はアシリ (カキ養殖でとらなくなる) イシャリでも深い所は丈3~丈5を使用。
	あわびなまこ	カギに竿 サデ(ガラス箱を使用) 2人乗り、丈1~丈3 ロシキ網を曳く —「ナカダナ」、スキ20尺、 肩幅5尺、深さ2.5尺、1人乗り	
地先沿岸	水晶型定置網 杭…5本立と7本立 ロク地曳網1日5月 ・鰐(いわし)地曳網 ・大網 (小竹、狐崎の場所借用)	「ナカダナ」、スキ丈3~丈8 家によって2~3人乗り 「タナヅキ」、スキ25尺、1艘でまく 高船…「ドツキ」、くり船、スキ30尺、 肩幅6尺、深さ2尺 筒合…「ダンペ」 沖ノ見(目)…「ドツキ」「ダンペ」	10か統 昭和のはじめまで ↓ ロ4丁 カイ6丁 12人乗り
沖合	ウケグリ	「ナカダナ」、スキ長23尺、肩幅6尺 深さ2.5尺、2~3人	ウケグリでシャコエビをとる
	旧3月 旧5月 も(延繩) (田代沖) たら繩 (旧11月~2月) (田代、長波、萩浜沖)	同 上 (兼用) 同 上	←切り換え

鹿立

話者：平塚賢蔵（昭8・5・25日生）

（一）使用手漕ぎ船

地方名：「カッコ」（和船）

船型：一枚棚

造船年月：昭和二十年五月十五日

船大工：牡鹿郡小網倉清水田浜

横本

義松

主材：杉

造船日数：14日位

別材：ミヨシシヤキ。

ロコツ（マツラ）→松

船パリ→桧。

コベリ→クヌギ。

スミレ→クヌギ。

寸法

シキ長…18尺5寸  
シキの厚さ…2寸  
船幅…5尺トダテの厚さ…2寸  
ミヨシのビラキ…8寸  
タナの厚さ…1.2寸  
トダテのビラキ…ミヨシより立つてい  
る。乗員…二人。  
漕法…定置網は一櫂、一丁櫂、  
也是簡便丁櫂使用漁種  
…定置網（水晶型）。

地先より80間どころの水底。

はも簡漁…田代沖

船問…ナマ・カメ・ヤカデ・トその問

櫂…友櫂・ワキ櫂・向かい（ゆ）櫂

各部の…カンヌキ・コベリ・トコ

名称…トダテ・上タナ・中タナ  
名稱は帆を立てた場合使用。

□ 鹿立の漁種・漁場と船型

漁場	漁の種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	鮑	スモグリ	(少ない)
	つぶ		(多い)
	なまこ（こしき網）	「カッコ」、タナヅキ、スキ 18.5尺、幅5尺	(昔)
	ひじき		
	のり		
	ふのり		
地先沿岸	まつも		(少々)
	・水晶型定置網 (鳥島灘沖合80間)	「カッコ」、タナヅキ、スキ長 18.5尺、幅5尺、2人乗り、 1櫂、1丁櫂	3軒で1把を交代で操業
	・雑縄（根縄）	同 上（兼用）	
	・はも簡延縄	同 上	
沖合	新5月末 ↓ 8月 ・はも簡 (キミガネ沖)		
		同上	
	・鰐漁（金華山沖）	八丁口（凝餌釣具ツノを利用 した一本釣）	・鰐漁 大正初年頃納屋で加工し節 にして北前船がケセン地方 から塩釜港にはこぶ。

• フナタテ：満潮時を利用して船揚場にコロで曳いて揚げ、船底についたフナタムシを藁や杉葉でもやしゆぶして駆除した。船の耐用年数

12～13年。  
• 一階棚を「カッコ」と呼び、棚ツキ（二階棚を「カッコ」と称した。棚

（三）現有の手漕船なし。  
るが重い。祝田の阿部忠雄大工にも一般注文する。  
現存の手漕船なし。

漁場	漁の種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	鮑 なまこ まるこ(貝) 春ふのり(手) わかめ、ひじき 夏てんぐさ まつも 冬のり ガゼ	「サッパ」「タナヅキ」、スキ長丈3、肩幅4尺 ~5尺、深さ1.5尺、1人乗り サデ(カギ)……同 上 こひき網……「タナヅキ」、スキ長丈8 肩幅6尺 磯でナサシで女がとる。かれいの糸でくわえて 女性 簾でいそでとる すもぐりで手でとり、スカリに入れる水中メガネで観て いそで手でとる 鮑のカラでむしりとる 「サッパ」「タナヅキ」、スキ丈3、1人乗り	箱メガネ、カギ、ねり ガイあやつりとる。 特定の人の入札。ロード清いで網を曳き、 丈8のタナヅキで大網から簾を買って イワシ釜でにしめし メででしめて乾燥し町に売った。 カゼサデでとる
地先	大網(るか続) 水晶型定置網(5か続) かれい延繩(地先から100~200間とぶ)	筒合船「ダンペ」スキ33~32尺、ロ2~3、 カイ6(7・8人) 高船「ダンペ」スキ30尺、ロ2~3丁、 カイ6(5・6人) 沖ノ目「ダンペ」スキ30~27.8尺、ロ2~3丁、 カイ4(5・6人) 「タナヅキ」、肩幅5~6尺、 <u>丈8~20尺</u> 深さ2.5尺、2人乗り	キ(岸)、ナカ網、 三丁目の三か続 ↓兼用
沿岸	小網、かれい刺網(地先の砂地と泥地との境~シロ境)	同 上(兼用) 2人乗り、 <u>刺網は3人</u>	小さな網が入る べた網、ウキなし、 網をかけると落ちるので20分位である。1日2・3回 冬至10日前地先10間位のシロ境に産卵にくる(城)
沖合	はも筒(延繩式)(7・8月) 田代三つ石沖 たら繩(11月~2月)	スキ丈8~20尺、帆掛 ↓ 兼用、ロ2~3丁、カイ使用せず、帆掛	筒は竹で自製(市吉の) (以前はスズ竹、カラ竹、真竹) (縦) (横)

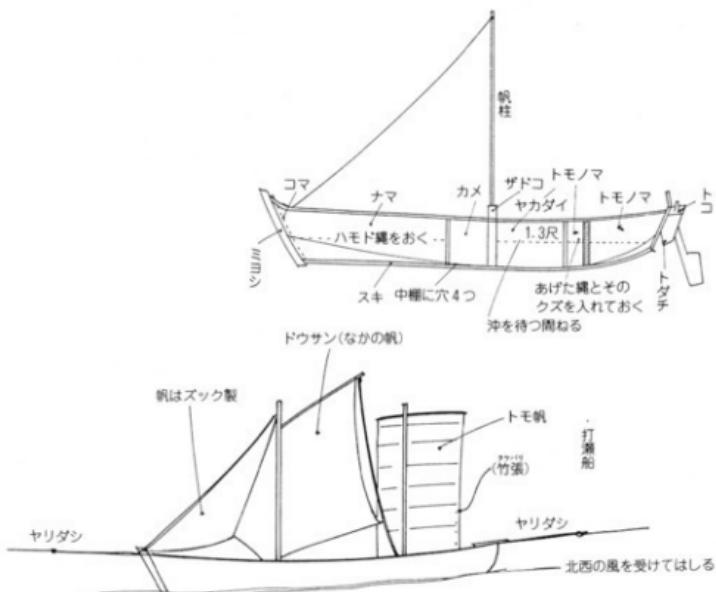
□) (一) 話者: 平塚忠兵衛(大正15年生) 手漕船は現存しない。10年前なくなる。  
○) 漁種漁場と船型

・ フナタテ: 新造船が、一番、二ラと言う虫にやられるので、船を前の浜の船揚場に引きあげ、干潮時船底をカヤなどをたいてゆぶし駆除する。修

理は萩浜の齊藤正人太工の兄、清んだ。

漁場	漁の種類	呼び名・船型・寸法	備考	
磯	なまこ(こしき網) (冬場)	「タナヅキ」、スキ長22尺、肩幅5.2~5.5尺 (5.6)、深さ3尺(家によって1.2寸ちがう)	こしき網を 口で曳く 	□ (-) 竹の浜 現存の手漕船はない 漁種・漁場と船型
	鮑	「サッパ」「タナヅキ」、スキ長丈物 (イソサガシブネ)	権利を他浜にゆする	
	ふのり(旧2月)	女性がとる		
	ひじき(旧2月)	食う位しかとれない		
	わかめ(旧3~4月)	いそで鎌でとり、かごに入れた(女性)		
地先沿岸	・はも筒(延繩) 夏…満内→田代沖…旧 10月20日えびすこまで	「タナヅキ」、スキ長22尺帆掛		話者: 平塚道雄 阿部力治 昭寿 明 3 44 44 ・ 11 4 2 ・ 10 15 11 生 生
	・かれい刺網 →これで正月をした。 桂島付近「冬至10日前」 城境に産卵に来る。	(昭和13~20年) 「タナヅキ」 22尺(シキ) ロ3丁、2丁 網はあさ網(太目がれいは網目5寸2分~5寸8分、中古品を七ヶ浜やユリアゲ、荒浜より買う。)	・巡航船にまに合うよう に朝1時~2時に起きて 漁をしたので「ツラアラズ、シヨバイ」と言った (洗顔できないほど忙しい)	
	・水晶型定置網 桂島付近他(11か続) 9 月節句り上げ	「タナヅキ」 スキ18尺~20尺(1人乗り)	ねう、青、たら、いわし、 すずき	
沖合	打漁網 (石巻湾→田代沖→ 福島沖) 冬期	「ミカワセン」 「ウタセ」スキ長(40尺以上) 65尺? ズック帆(角帆)が主体、ロ2丁、カイない、4人乗り、「シオ」では入らない「シオ」とはジャリ、移の場所	明治~大正の打漁船 かれい、ひらめ ・玉木造船所 ・七ヶ浜のキンボ大工が3~4人が3~4ヶ月かけて ここで造る	
	もうか繩			
地先沿岸	・大謀網 (三丁目、根葉地目)	「ダンベ」スキ 「ドッキ」スキ30尺肩幅7~8尺	肩幅1丈 大正で終り	

「タナツキ」(スキ長三三尺)



所有者 項目	山口源藏 (大正10.1.1)	佐藤保雄 (大正9.2.20)
地 方 名 シ キ 船 深 造 船 月 日	18.5尺 5尺 昭和18年頃	ワセニコ 15尺 4.5尺 2尺 昭和21年頃 (15年使用)
船 分 工 大 布 乗 漁 使 用 種 類	月浦新保大工 2人 2丁檣 ハモ筒 ウチグリ(しゃこ) コシキ網(なまこ)	十八歳後藤広 牡鹿半島一帯 2人 2丁檣 同 左 杉
主 石 造 船 日 数 別 材	シキ長1尺 1人(15日) ミヨシ(柳) 床(松) マツラ(松)	シキ長1尺 2寸5分 1寸2分 2寸5分
シ キ の 厚 さ タ ナ の 厚 さ ト ダ テ の 厚 さ ミ ヨ シ の ヒ ラ キ ト ダ テ の ヒ ラ キ	2寸5分 1寸2分 2寸5分	2寸5分 1寸2分 2寸5分

漁場 使用した手漕船 (タナツキ型)	漁の種類	呼び名・船型・寸法
磯	てんぐさ (すきぐり) 鮑 (入札制)	「和船」、スキ丈5、 ロ15尺、1~2人乗り 「サッパ」、スキ「丈 物」(1丈)
地	うけぐり (シャコエビ) ⑥ ↓ はも簡縄	「和船」(タナツギ) スキ丈5 肩幅4.5~5尺 深さ2尺、1人乗り
先	⑧ ↓ なまこ (こしき網)	同 上 1人乗り ロコギ→15尺
沿	⑧	同 上 1人乗り ロコギ→15尺
岸	大網 天保網 バハ網(小網)	ダンベ船、スキ30尺 (明治~大正末)

□(→) 洋  
漁種・漁場と船型  
現存の手漕船なし。

話者: 佐藤保雄  
(大正9年2月8日生)

漁場	漁種	呼び名・船型・寸法	備考
磯	鮑	「フェッコ」(1枚棚、2枚棚) スキ長1丈一丈3、肩幅4尺、2櫓 深さ1.2尺~3尺、2~3人乗り 「カッコ」…昭和初年まで (くり船の準構造船)	オモテ…「かい」 トモ…「かじしかい」 水底の深さ…3尋~4尋以上 (竿2本つなぐ)
	わかめ	同上船(カギと縁)	
	ひじき	タ(縁でとる)	
	ほや	タ(「ホヤカギ」とる)	竿に鎌をつけてとる 昭和30年頃
沿岸	延縄	同上	
	大網のある付近	檣・櫓1丁(たまに2丁)	
	1月		
	2 カ		
	3 レイ		
	4 タ		
	5 ハ		
	6 ラモ		
	7 ド		
	8 タ		
	9 コ		
	10 水晶型定置網	同上	いわし、すずき、雑魚
	11 大謀網	「ダンペ、スキ30尺」	よその人…鰊川の阿部 塙釜のハガ、岩手の山根 ……個人経営

・沖合は動力船使用 ・調査時…昭和10年代~20年代

(一) 現存…大網船 「ダンペ」(大仲)  
 一櫓。岩手県三陸町越喜来道下漁業部所有。昭和40年頃、田代漁協でプラスチックでおおう(玉木造船にて)、その後、道下漁業部に譲渡して漁業部で現在使用中(調査手漕ぎ船8参照)

(二) 漁種・漁法と船型  
 話者…小谷清夫(大正10・2・18生)  
 遠藤与四郎(大正2・3・10生)  
 尾形彦夫(大正15・10・25生)

漁場	漁種	呼び名・船型・寸法	備考
磯	3 ふりのひじき	わかめ…	ふのりは漁盛りがあった田の無い人は海草で生活した。
	4 わかめ	…「フェッコ」タナブキ(「ベッコ」大網の岩手言葉)	ふのり…4ヶ月
	5 わかめ	スキの長さ16~18尺、肩幅5尺、深さ2.3尺、2人乗り、ロ、カイ1丁	ひじき…2ヶ月
	6 わかめ		わかめ…2ヶ月
	7 わかめ		てんぐさ…1ヶ月
	8 わかめ		岩のり…2ヶ月
	9 わかめ		で食べて行くに良い
	10 岩のり	「フェッコ」タナブキ→1階棚 わかめと同じ船	(生活出来た)
	11 岩のり	・素手「スモグリ」でヤスカリに入れ浮上して船に入れる。船は同上	タナブキの前はカッコ、網地からくる。カッコは準構造船、くり船
	12 岩のり	・「三本かぎ」大正初の船は上と同じ	・カギは渡波、谷用のカジヤから買う。
	鮑(三重石) はや(7月~8月) なまこ(11月~3月) たこ(10月~1月)	・同上の船、2人乗り、たもで4尋~5尋ののをすくう ・イシヤリ使用、同上の船、ロで2人乗り	に係留。 網用)を譲渡 現在 北上川
			一 現存手漕船なし。 注: 田代漁協で61年頃、玉木造船所に、プラスチックでおったダンペ(沖の目)(大正13・3・4生)
沿岸	・延縄	「ふね」2階棚、スキ長25尺、幅7~8尺 ロ3丁、カイ1丁	二 漁種・漁場と船型 話者…津田佐男(大正元年・8・20生) 久保栄一(大正13・3・4生)
	4 かれね	渡波の打瀬でとったしゃこをねうの間にする。	・ 大船造船の系譜 杉浦利惣兵衛 杉浦啓太郎 齊藤清一正人(森浜)
	5 いとう		・ たら網を「ナガ(長)網」と言う 50櫓打って生活した。
	6 いとう		11 ま(だらら)
	7 いとう		12 ま(だらら)
	8 いとう		・ 簡合「ダンペ」、シキ長31尺 高船「ドッキ」→「ダンペ」
	9 いとう		昭和10年以後
	10 いとう		沖ノ日ノシキ長30~27尺
	11 いとう		
	12 いとう		
	・大謀網		
沖合	鮪漁(長渡し沖)	「八丁口」	(明治中頃まで)

二 漁種・漁場と船型  
 話者…津田佐男(大正元年・8・20生)  
 久保栄一(大正13・3・4生)  
 • 大船造船の系譜  
 杉浦利惣兵衛  
 杉浦啓太郎  
 齊藤清一正人(森浜)  
 遠藤四三男(田代)

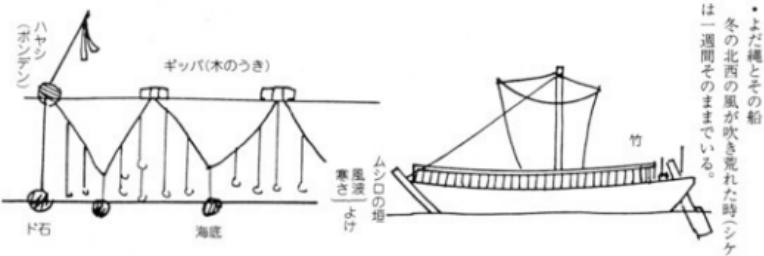
漁場	漁種	呼び名・船型・寸法	備考
磯	鮑 (3~4人入札) 年中休みなくとる。	「イッケダナ」タナヅキなし スキ丈、 <u>丈物</u> 、深さ1.2~1.5尺 幅4~4.5尺、1人乗り	昭和40年から 「タナヅキ」になる。
	1 いそのり.....	...足に「ワジ」をはき、女、あわび貝でけずりとる。	阿部金太郎大工 つくる。
	2		
	3 わかめ、ひじき		
	4 まつも、 5 つのもた	「イッケダナ」鮑と同じ船 乗員 男と女の共同	
	6 ほ 7 や		・はやはひまな 人が適宜とる。
	8	「イッケダナ」は1軒で1艘はあ った。	
	9		
	10		
	11		
	12		

(-) 小竹浜  
現存手漕船 調査時(七月月中旬)  
で六艘あったが現在、そのうち二艘廢棄(11月)、現在四艘のみとなる(調査)  
話者: 阿部福治  
阿部 正  
阿部款一  
(大正12年生)  
大正4年生  
大正7年生  
大正23年生  
大正29年生

漁場	漁種	船
地先	・延繩	『タナヅキ』
	1	
	2 カレイ	・スキ長 丈5~丈6
沿岸	3	・肩幅
	4	4.5尺
	5	
岸	6	・深さ 2尺
	7	
	8 ハモ繩	・口 2丁
沿岸	9	・カイ 1丁
	10	
	11 小繩	大たら
岸	12 よだ繩	→弁天島の沖

・沖合はめの  
繩とカツオ漁  
力である  
者の時代)

る。  
・金比羅様のお札がどこ家の家にもあ



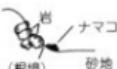
漁場	漁種	呼び名・船型・寸法	備考
磯	鮪 ネリガイを後に漁 いで箱メガネをの ぞいてカギ引っか けてあげる。 ・なまこ タモでくう		「カギ」の長さは竿も 入る 春(5~6尺) 秋(15尺) 冬(20尺)
	1 ひ 2 の じき	草刈り鎌、デバ包丁でとる 手でとる	
	3 く 4 の り	ひじきのりと称して海草につくのりで 手でとる 「口開」3日後は「ツラシ」=自由採取 竿の先に鎌をつけ「イッケッコ」に 2人(1戸)のってとる	
	5 わ かめ		
	6 て ん ぐ さ	大人・子供も眼鏡をかけスモグリして手 でとる。6月1日「口開け」以後は「ツ ラシ」又「イッケッコ」にのって「テ ングサカギ」でとる	〔口の話者:須田与一郎(昭4・2・16生)
	7		「テン草カギ」は渡波 の本田カジヤで作る
地	1	①「タナヅキ」スキ長30尺以上、ロ6丁、 帆走、カイなし、ミヨシがトダテより	①は金華山近海 ひらめ、かれいを曳く
先	2	帆走、カイなし、ミヨシがトダテより	
	3	3尺~4尺でいる。ナレ風吹く頃や める。	②はシャコエビ、赤カジカを曳く
	4 ウ ケ ガ リ	②「タナヅキ」スキ21尺で、後でスキ18尺	
	5 オ	③「タナヅキ」スキ長20~21尺(昔)	
沿	6 キ ハ モ 繩	④同上2丁口、1カイ、2~3人乗り 肩幅4.8~5尺、深さ2.5尺	
	7	⑤「タナヅキ」スキ長21尺、岸の方は ハシゴ定置網	
	8		
	9 リ	えびす講まで	
岸	10		
	11		
	12		

(-) 佐須の浜  
現存している船2艘、現在使用  
していない。一般は寄付  
ド7参照

〔口〕漁種・漁場・漁法と船型  
をやる  
祖父の時代、メノケ延縄(金華山)

須田栄治郎(大15・11・5生)  
雁部鉄雄(大15・7・4生)

四 調査結果から  
(-) 調査時(七月)の現存漁船は小



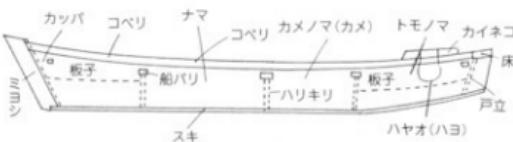
竹六艘(磯船)、佐須一艘(磯船)、田代島仁(斗田)一艘(ダンベ船)(大網用)の八艘のみであった。そのうち小竹の二艘は一月に船場の整理のため廃棄処分された。部分船の中に市に寄付、収集許されたものが一艘あった。このように浜の伝統的和船であり、文化財である民具が急速に廃棄の運命にあるので、市で緊急に保存、確保する場所を設定すべきである。

(-) 船の呼び名は各浜で若干ちがつてゐる。一枚櫓の磯船を佐須・小竹ではイケフコ、佐須ではスキ長以下の小舟をチヨロコとも呼び、田代島はフネッコ、富貴浦ではボート、江ノ島ではサバと呼んでいる。呼び名と船型は必ずしも一致しない。普通、一枚櫓磯船をタナヅキと呼んでいるが、牧浜、月浦ではワセソコ、昔はくり舟の準構造船で構造船接船と船型がちがう。

ミヨシ・トダテのヒラキも女川町江ノ島のサッパのミヨシのヒラキ(斜角)は一尺に対して七寸のものに対し萩浜では七寸五寸と斜角が多く、シキの上げ反り、波静かな牡鹿半島の表浜萩浜で低く、荒海は高い。同じ牡鹿半島でも表浜と義浜、各漁浦の漁場の自然条件に応じて、船型に微妙な差異が見られた。



No. 1



No. 2

調査地 石巻市小竹浜  
本船種の地方名 「イッケッコ」「イッケダナ」

寸法 シキ長…三三三(Ⅳ)  
船幅…一二二(Ⅲ)、深さ…二二二(Ⅲ)  
船大工 阿部忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一六九  
九一三(父が師匠)

所有者 岩崎民一  
電話 九七一四〇五一  
寸法 シキ長…三三三(Ⅳ)  
船幅…一二二(Ⅲ)、深さ…二二二(Ⅲ)  
船大工 阿部忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一六九  
九一三(父が師匠)

本船種の分布範囲 牡鹿半島の喜浜・祝田→東浜方面  
漁法 漁の時は櫂のみ操作、船外機一、櫂一(昔は櫂一、櫂二)  
使用魚種 破物(鯛、わかめ、ほや漁)

漁場の自然条件 浜の前方(衝)にある弁天島や生草島の磯や沿岸

調査地 石巻市小竹浜  
本船種の地方名 「イッケッコ」「イッケダナ」

寸法 シキ長…三三三(Ⅳ)、船幅…二二二(Ⅲ)、深さ…三四四(Ⅳ)  
船大工 阿部忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一六九  
一三三(父が師匠)

本船種の分布範囲 祝田浜、佐須浜、小竹浜、折浜→東浜の各浜  
漁法 漁の時は櫂のみ操作、船外機一、櫂一(以前は櫂一、櫂二)  
使用魚種 破漁(鯛、ほや、わかめ)

漁場の自然条件 浜の前の弁天島や生草島沿岸

調査地 石巻市小竹浜  
本船種の地方名 「イッケッコ」「イッケダナ」

寸法 シキ長…三三三(Ⅳ)、船幅…二二二(Ⅲ)、深さ…三四四(Ⅳ)  
船大工 阿部忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一六九  
一三三(父が師匠)

本船種の分布範囲 祝田浜、佐須浜、小竹浜、折浜→東浜の各浜  
漁法 漁の時は櫂のみ操作、船外機一、櫂一(以前は櫂一、櫂二)  
使用魚種 破漁(鯛、ほや、わかめ)

寸法 シキ長…三三三(Ⅳ)  
船幅…一二二(Ⅲ)、深さ…二二二(Ⅲ)  
船大工 阿部忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一六九  
一三三(父が師匠)

所有者 岩崎民一  
電話 九七一四〇五一  
寸法 シキ長…三三三(Ⅳ)  
船幅…一二二(Ⅲ)、深さ…二二二(Ⅲ)  
船大工 阿部忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一六九  
一三三(父が師匠)

本船種の分布範囲 牡鹿半島の喜浜・祝田→東浜方面  
漁法 漁の時は櫂のみ操作、船外機一、櫂一(昔は櫂一、櫂二)  
使用魚種 破物(鯛、わかめ、ほや漁)

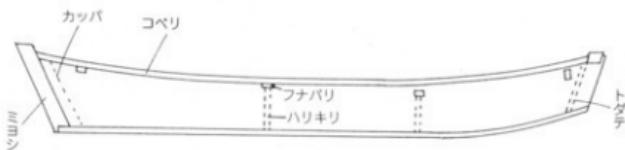


No. 3

調査地 石巻市小竹浜  
本船種の地方名 「イフケコ」  
「イフケダナ」

寸法 シキ長…三三六㌢、船幅…一二  
二㌢、深さ…三六㌢  
所有者 佐々木 芳雄  
電話 九七一四〇四三三  
船大工 佐藤 大工  
師匠の住所 梶田

年月日 平成二年七月二十四日  
主材 杉、石数 三石  
造船日数 一人で一日  
別材(使用部位) ミヨシ・ケヤキ、  
フナバリ・檜、床・松  
シキの厚さ 一・五寸  
トタデの厚さ 一・五寸  
平成二年十一月廃棄処分

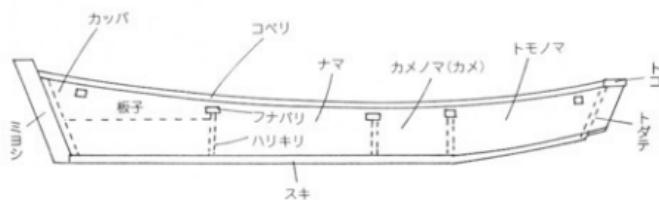


No. 4

調査地 石巻市小竹浜  
本船種の地方名 「イフケコ」  
所有者 小川 悅男

寸法 シキ長…三一七㌢、船幅…一  
一㌢、深さ…三〇・九㌢  
船大工 阿部 金太郎  
師匠の住所 小竹浜

年月日 平成二年七月二十四日  
主材 杉、石数 三石  
造船日数 一人で一日  
トタデの厚さ 一・五寸  
トコ  
トモノマ  
スキ  
ナマ  
カメノマ(カメ)  
フナバリ  
ハリキリ  
板子  
カッパ  
コベリ  
トダテ  
トコ  
トモノマ  
スキ  
ナマ  
カメノマ(カメ)  
フナバリ  
ハリキリ  
板子  
カッパ  
コベリ





No. 5

調査地 石巻市小竹浜  
本船種の地方名 「イワケッコ」  
「イフケダナ」

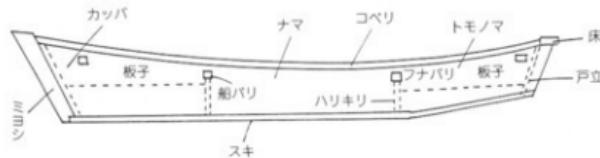
寸法 シキ長…三五〇、船幅…一  
二〇、深さ…三〇・〇cm  
造船日数 九七一四二二一  
船大工 阿部 庄一郎  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一ー六九一ー三

漁場の自然条件 弁天島や生草島沿岸  
調査地 石巻市小竹浜

本船種の地方名 「イワケッコ」  
「イフケダナ」

寸法 シキ長…三三〇、船幅…一  
二〇、深さ…三三・三〇cm  
造船日数 九七一〇四八  
船大工 阿部 忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一ー六九一ー三

漁場の自然条件 浜の前にある弁天島や生草島沿岸  
調査地 石巻市小竹浜



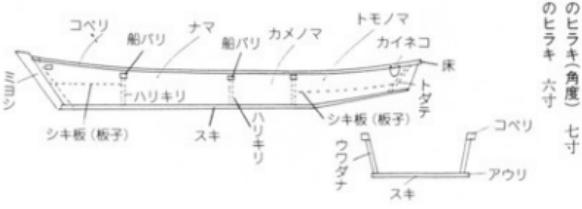
No. 6

所有者 阿部 庄一郎  
電話 九七一四二二一  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一ー六九一ー三  
寸法 シキ長…三五〇、船幅…一  
二〇、深さ…三〇・〇cm  
造船日数 九七一四二二一  
船大工 阿部 忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一ー六九一ー三

シキの厚さ 一・五寸  
トタデの厚さ 一・五寸  
寸法 シキ長…三三〇、船幅…一  
二〇、深さ…三三・三〇cm  
造船日数 九七一〇四八  
船大工 阿部 忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一ー六九一ー三

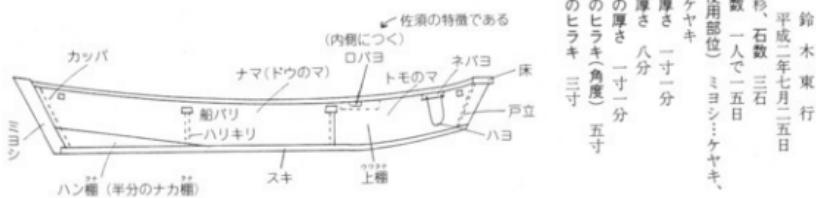
シキの厚さ 一・五寸  
トタデの厚さ 一・五寸  
寸法 シキ長…三三〇、船幅…一  
二〇、深さ…三三・三〇cm  
造船日数 九七一〇四八  
船大工 阿部 忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一ー六九一ー三

シキの厚さ 一・五寸  
トタデの厚さ 一・五寸  
寸法 シキ長…三三〇、船幅…一  
二〇、深さ…三三・三〇cm  
造船日数 九七一〇四八  
船大工 阿部 忠雄  
師匠の住所 石巻市祝田浜字祝田一ー六九一ー三





No.7



調査地 石巻市佐須浜  
本船種の地方名 「イッケゴ」  
「イッケダナ」「ハンタナ」ナカダナが  
半分しかない  
所有者 須田与一郎  
電話 二四一九一六  
寸法 シキ長:三〇三四、船幅:一〇  
六〇、深さ:三六〇  
造船年月 昭和五〇年頃(須田治から貰う)  
本船種の分布範囲 船大工 須田円吉  
師匠の住所 神田  
船大工 須田須田  
漁場の自然条件 ここ独自の船で、小竹浜では幅が大き  
くなる(荒場だから)  
何人乗りり 一人乗り  
漕法 沖へは櫓でござ、磯では櫓であ  
やつる  
使用漁種 磯物(なまこ)、鮑(うに)  
尾崎あたりまでの地先沿岸

調査地 石巻市田代浜・牛田  
本船種の地方名 「ダンベ」「ドウブネ」  
(岩手県では「オオナカ」)  
所有者 岩手県三陸町越前舟下漁業部  
寸法 シキ長:一〇〇、船幅:三〇五  
〇四、深さ:九四〇  
造船年月 昭和三〇年代四〇年頃(玉木  
造船所)プラスチックをかける  
本船種の分布範囲 杜島半島各浜  
何人乗りり 現在三人~四人 三〇年代一  
五一~六人  
漕法 現在動力船曳航、昔櫓二丁一  
丁に二人で櫓六丁  
使用漁種 大型定置網(落し網)マグロ、  
イワシ、ブリ、鰯  
漁場の自然条件 田代島西岸  
・田代漁協が道下漁業部にゆする。  
・この型のダンベ(プラスチック)で外側  
をおおうは玉木造船所で所有、現在、  
北上川に系留(田代漁協から譲渡)  
調査者 鈴木東行  
年月日 平成二年七月一七日

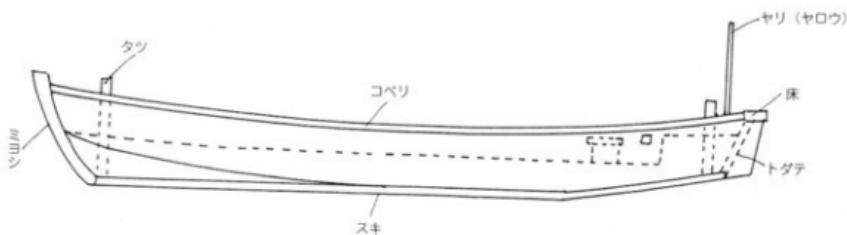


No.8

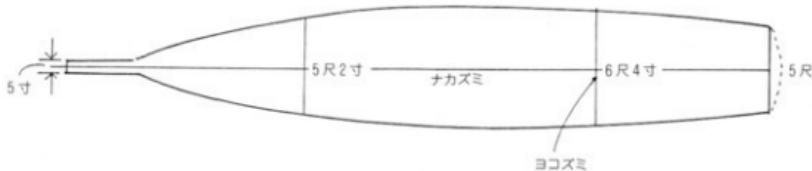


▲30年代のダンベ船

主材	杉、石数	三三石
造船日数	八五日	
別材(使用部位)	ミヨシタツ・ケヤキ、 スキ・スパント(マツラ)…裏かげやキ、 床…松	
シキの厚さ	三寸	
床	松	
タナの厚さ	一・七寸	
トダテの厚さ	二・五寸	



(中央断面)



# 石巻市半島部の板碑

—小竹浜・スケカリ浜を除く—

石巻市文化財保護委員 佐 藤 雄一

## 1. 調査期間と調査員

調査期間

平成元年一〇月四日

平成二年二月一八日

調査員  
佐藤雄一（石巻市文化財保護委員）

## 2. 板碑の概況

石巻市に属する半島部は、かつての萩浜村に相当する地域である。旧萩浜村は

明治二三年に萩浜を中心とした小竹浜、折浜、桃浜、月浦、侍浜、小積浜、教浜、竹浜、孤崎浜、福賀浜、田代浜の一二ヶ浜が合併して成立したものであり、

江戸時代にはこれら各集落が独立して、大煎餅の支配を受けたのである。江戸時代以前の中世にさかのぼる様子は、この地域に関する記録はなく、そのことはできないが、今回の板碑調査によつて

今回調査で確認された板碑は総数で二〇基であり、それらが各集落に二~三基にわたって散在していた。その中で紀年銘の確認できるものは、半數にも満たない七基だけであった。しかし、その上各集落に板碑の存在が確認されたので、これからはこれらを手掛かりとして、半島部の中世期が解明されることであろう。

これら半島部に存在する板碑は、小竹浜、スケカリ浜に集中的に見られ、これ

はすでに「文化財だより」第一号と第六号に調査概要を報告してある。

今回の調査は、これら密集している地域と田代浜を除いた地域に散在している板碑が対象となっている。しかし、侍浜・竹浜については確認することができなかつた。

## 3. 板碑の図示について

板碑の図示は、基本的には一〇分の一の拡本とスケッチを併置し、スケッチには板碑の内容を記しておいた。縮尺が一〇分の一におさまらないものについては併記してある高さ、横幅、厚さから推定していただきたい。

## 4. 年代の広がりと内容について

今回の調査で確認された板碑は総数で五五年（一四二八）八碑のように高さが二メートル以上もある十三枚板碑の存在である。この碑には、板碑が大日如来の三昧耶形を表わすものであることを明記しており、たとえば月浦墓地にあるNo.9の応永一五年（一四二八）八碑のように高さが二メートル以上もある十三枚板碑の存在である。

この碑には、板碑が大日如来の三昧耶形を表わすものであることを明記しており、たとえば月浦墓地にあるNo.9の応永一五年（一四二八）八碑のように高さが二メートル以上もある十三枚板碑の存在である。

この碑には、板碑が大日如来の三昧耶形を表わすものであることを明記しており、たとえば月浦墓地にあるNo.9の応永一五年（一四二八）八碑のように高さが二メートル以上もある十三枚板碑の存在である。

この碑には、板碑が大日如来の三昧耶形を表わすものであることを明記しており、たとえば月浦墓地にあるNo.9の応永一五年（一四二八）八碑のように高さが二メートル以上もある十三枚板碑の存在である。

小竹浜・スケカリ浜に集中している板碑をそろえた各集落の板碑は、それぞれ三基と数量こそ少ないが、市部では見られないような特色をもつたものが限られた地域で観察されるべきものではある。これらは石巻市半島部の板碑として限られた地域で観察されるべきものではなく、牡鹿半島における板碑群の一部として、牡鹿半島に散在する他の板碑とともに総合的に観察されるべきものである。

## 5. 保存について

小竹浜・スケカリ浜に集中している板碑をそろえた各集落の板碑は、それぞれ三基と数量こそ少ないが、市部では見られないような特色をもつたものが限られた地域で観察されるべきものではなく、牡鹿半島における板碑群の一部として、牡鹿半島に散在する他の板碑とともに総合的に観察されるべきものである。

これは言うまでもないであろう。また、同じ月浦地区ではあるが、前記の十三枚板碑の建立から一世紀以上も経過している水祿六年（一五六三）碑は、通常この時期は板碑建立の衰退期とされ数量も極端に少なくなり、型も小型化、内容も簡単になるにちがわらず、この水祿六年碑は、十三枚を刻し、さらに月輪に五点具足のバーンク全圓界日（如来）を配しており、銘文にいたっては、三行八五字を刻しており、内容・形式ともに板碑最盛期のものに匹敵するものをもつ

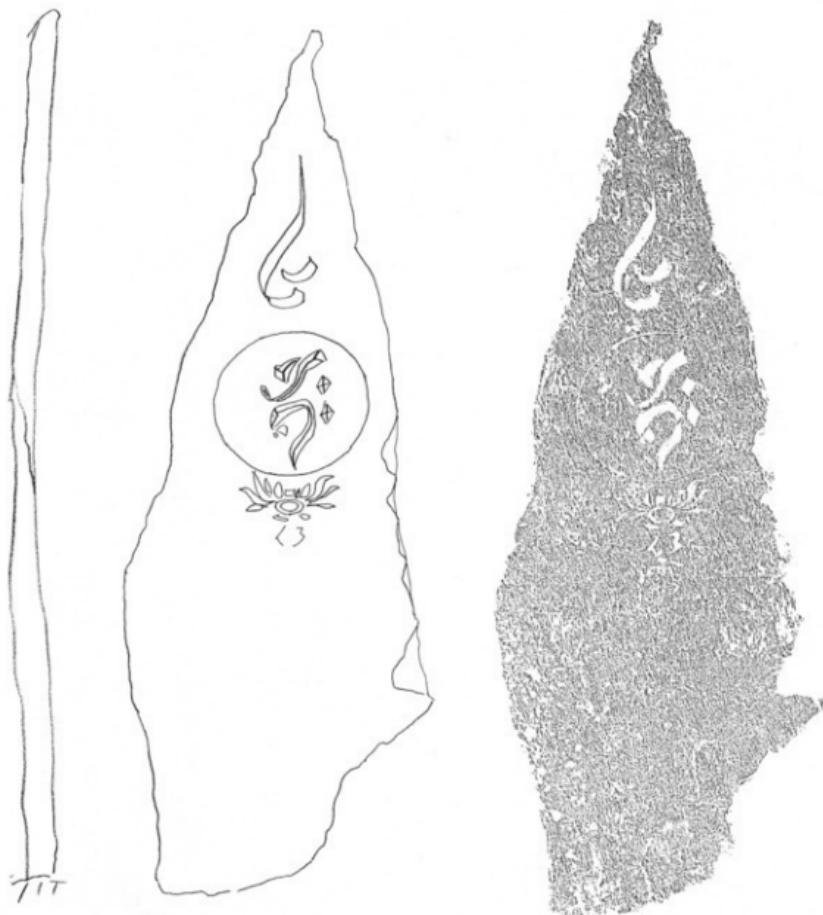
てゐる。また牧浜三國哲氏宅内のカーン（不動）種子と「初七日敬白」とだけ刻してあるNo.12の小型の板碑は、種子と初七日だけのいたつて簡単なものとして見過されてしまうようなものであるが、十三仏信仰における初七日の主尊がカーン（不動）であることを考えれば、石巻市内において数多くの板碑が十数枚の反式板碑によつてひらく知られてゐた。

三仏信仰における忌日と生尊が合致している事実と一致することがわかり、この小型板碑は、半島部においても十三仏信仰の普及があつたことを知らせてくれる貴重な碑であるといふことができる。



掲載板碑の位置図

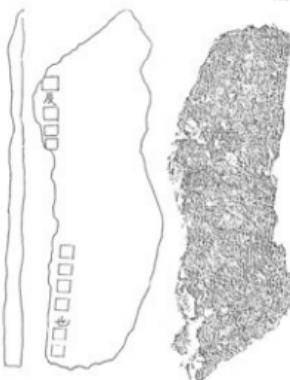
No. 1



No. 2



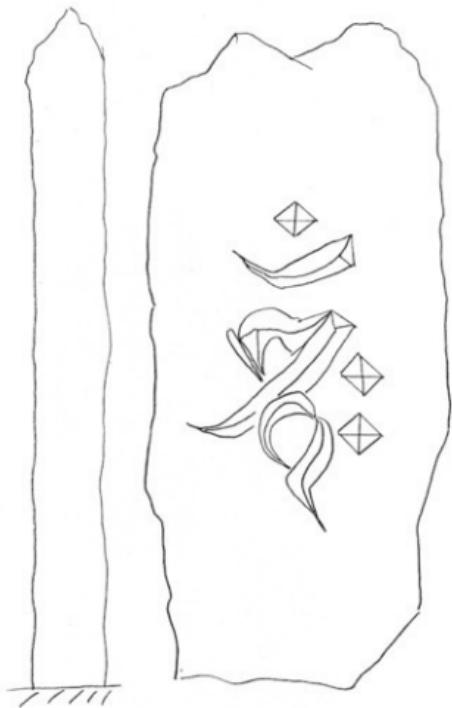
No. 3



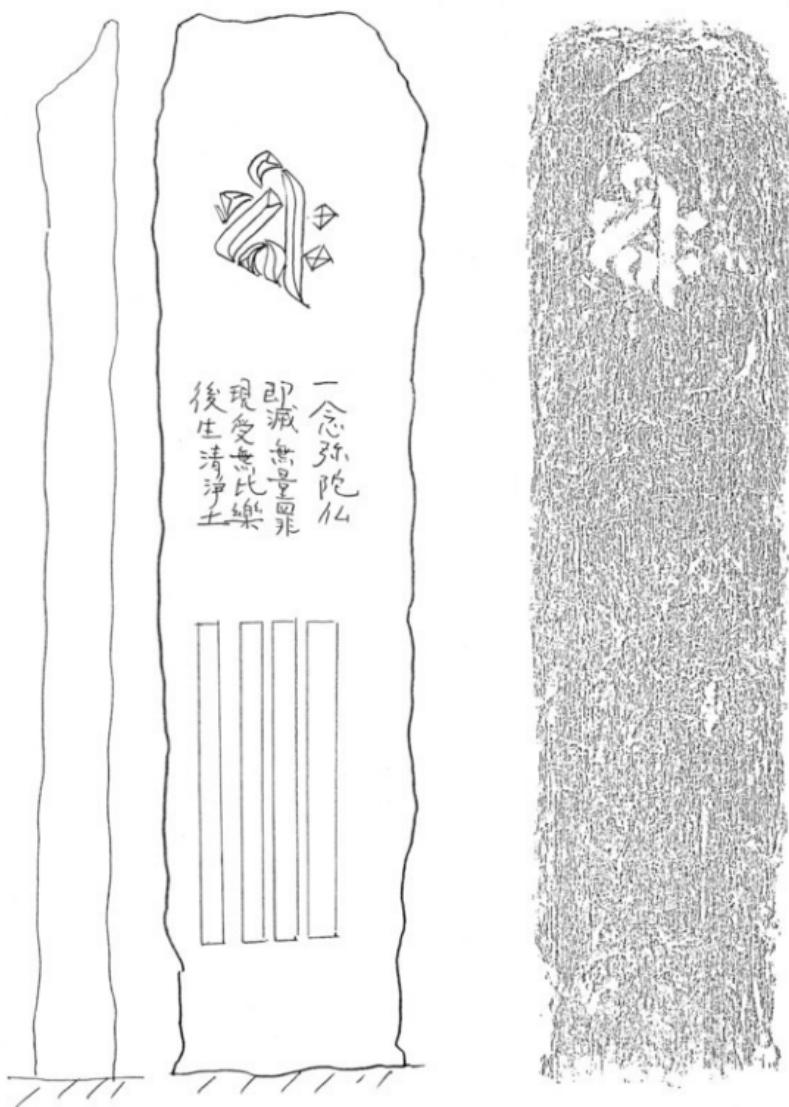
No. 4



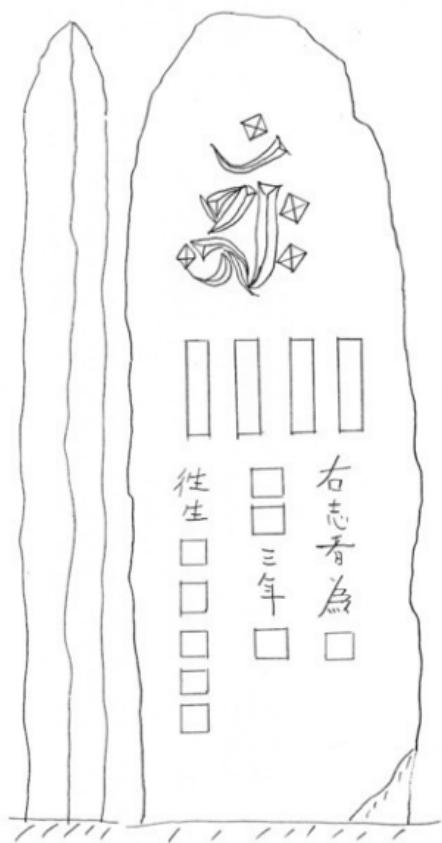
No. 5

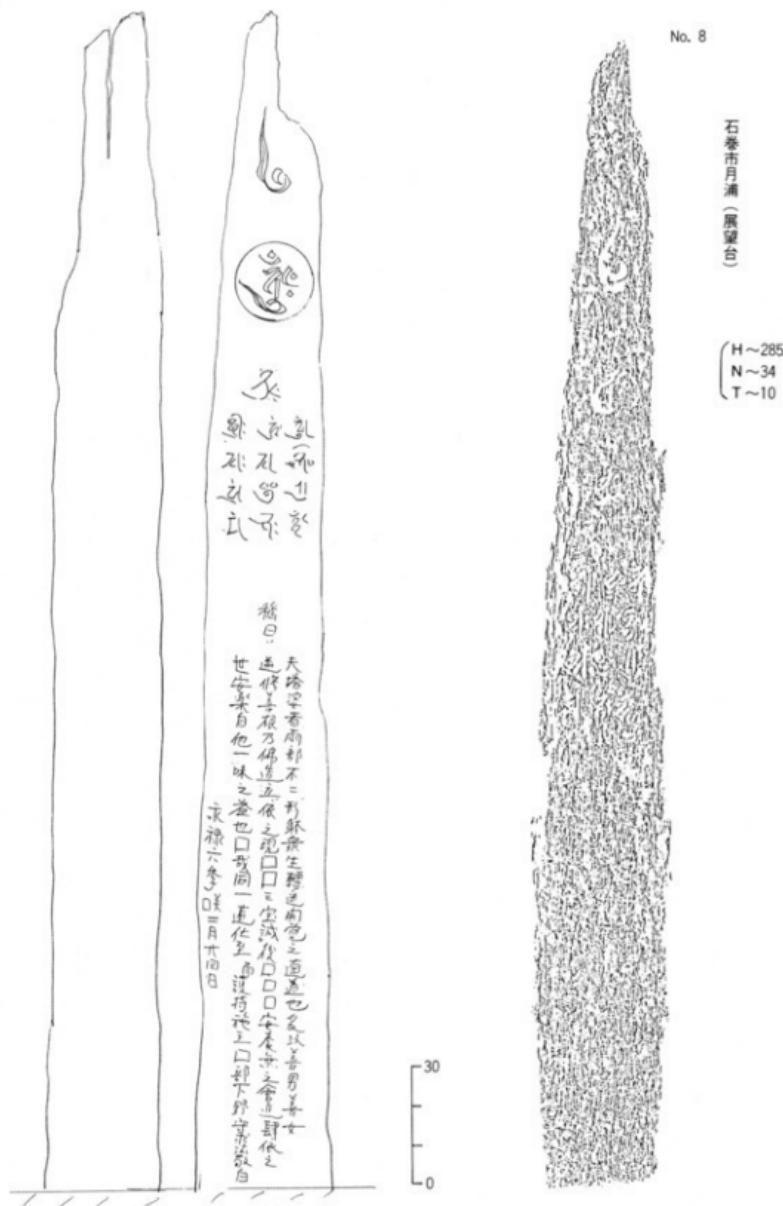


No. 6



No. 7





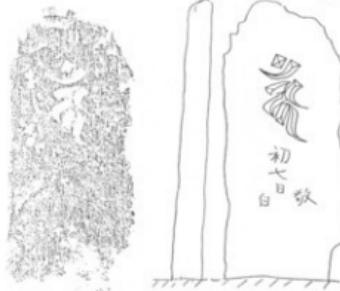
No. 9



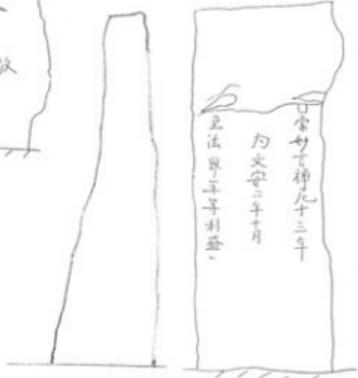
No. 10



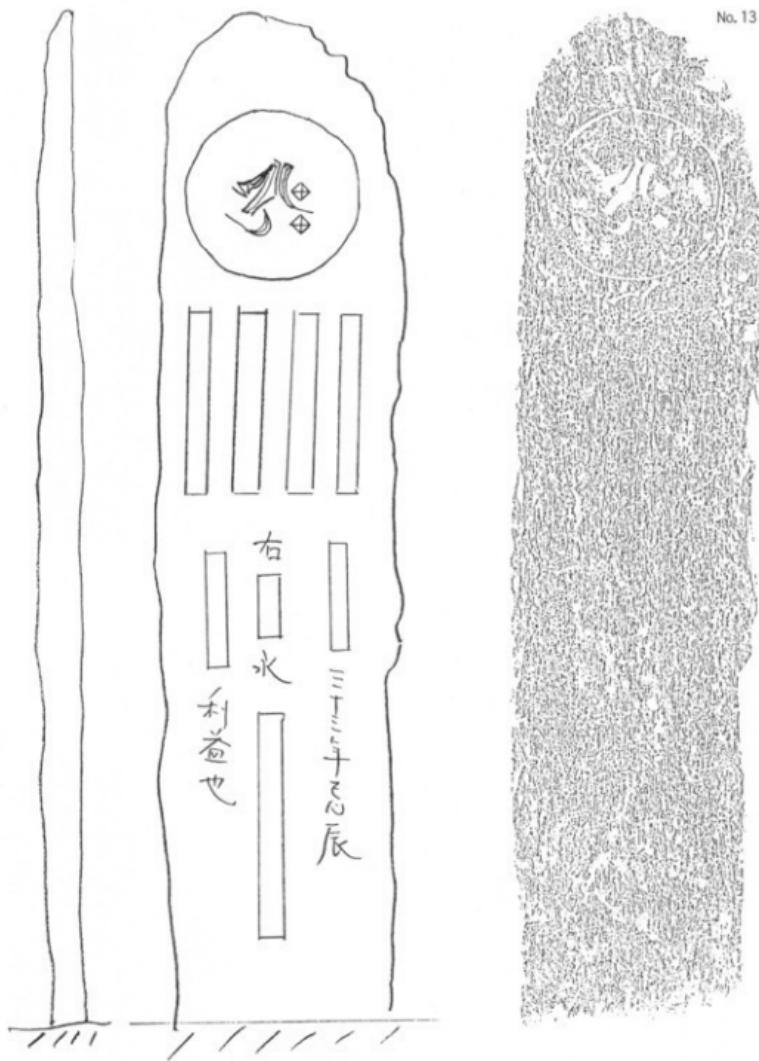
No. 12

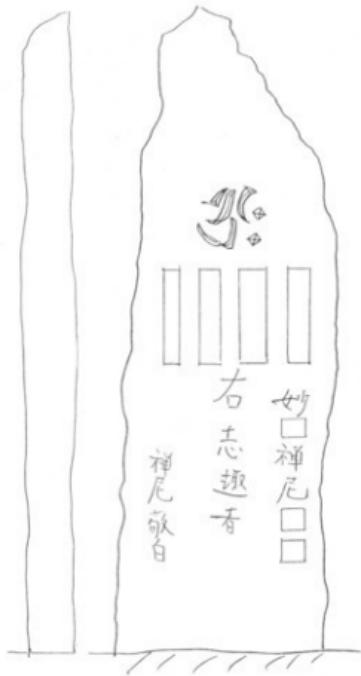
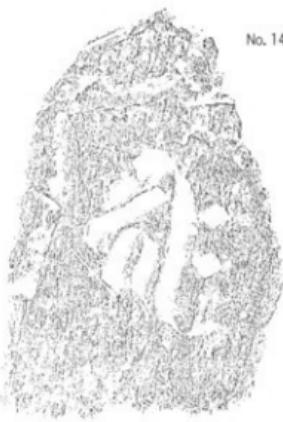
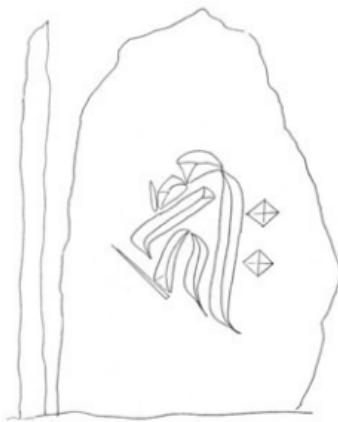


No. 11

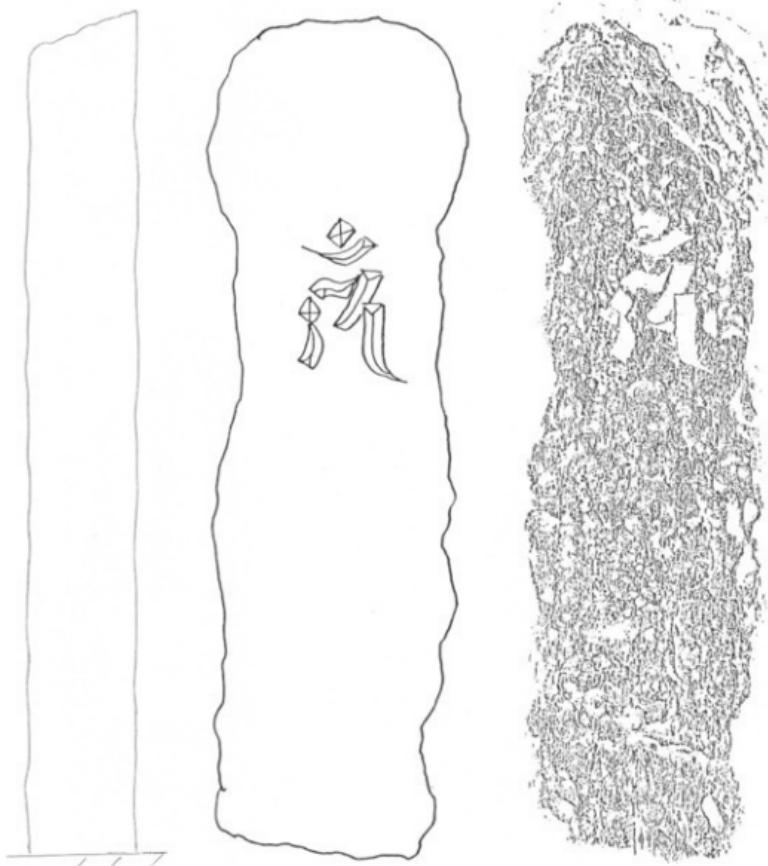


No. 13





No. 16

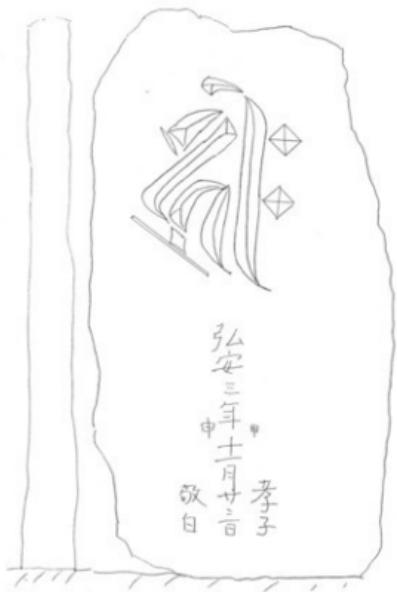


No. 17



No. 18

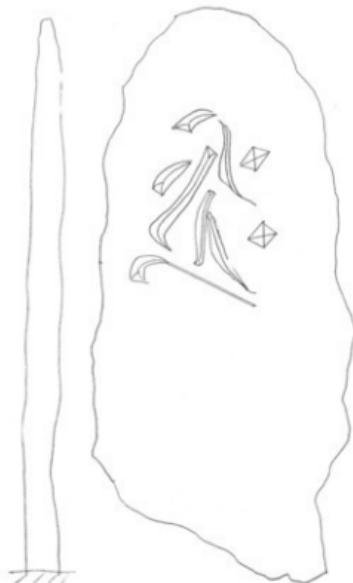




No. 19



30  
20  
10  
0



No. 20



30  
20  
10  
0

## 旧町名表示石柱設置事業 由緒ある町名を後世に

一 町 名 は 文 化 財

### 鶴 山

昭和三七年（一九六二）に「住居表示に関する法律」が制定されてから、昔から由緒ある町名が新しい町名に置きかえられるようになり、「旧町名はその住民からも忘れられてしまうような状況になりました。石巻市も例外ではありません。町名は、私達の祖先がその土地とどのようにかかわってきたかを知る重要な手掛かりであり、かけがえのない文化財です。

奈良時代前期、大和朝廷が桃生社鹿石巻地方の海道駿夷征伐のための拠点として「牡鹿橋」を建設。当初軍事施設だった同橋は後に都衛へ移行したとみられていました。建設場所は桃生郡矢本町赤井

遺跡に比定され、平安初期以降には、石巻市清水尻遺跡へ移ったものと推定されているが、両地間に東西に横たわる丘陵地帯は古来、郡司だった丸子（わに）氏一族の居館跡の伝承にちなみ、ワニ山（その一角には「西長山」の古称も残る）

と呼びならわされてきたといいます。

石巻市教育委員会では、すでに使われなくなつた町名を後世に伝えるため、旧町名とその由来を刻んでその地区に建立する事業を昭和五六年度から行って平成元年度までに一九本を設置いたしました。本年度は「鶴町」と「蛇田町」の二本を設置し、これで合計二一本になりました。

設置にご協力をいただいた方々に厚くお礼申し上げます。

### 蛇田町

寛文六年（一六六六）当時、自分の馬で宿場と宿場間の貨客を運ぶ伝馬役に從事していた石巻村の農民は、所有田畠が少なくなった町名を後に石川に傳んでいたため、旧町名とその由来を刻んで

その地区に建立する事業を昭和五六年度から行って平成元年度までに一九本を設置いたしました。本年度は「鶴町」と「蛇

田町」の二本を設置し、これまで合計二一本になりました。

設置にご協力をいただいた方々に厚くお礼申し上げます。

▲鶴山（総合体育館駐車場）

### 旧町名石柱 平成元年度まで設置した

#### 旧町名石柱

▲昭和56年度設置▼  
「新田町」＝千石町（石巻グランドラボテル前）

「渡波本町」＝渡波町三（内海笑方面前）

▲昭和57年度設置▼  
「横町」＝千石町（河北新報社前）

「中町」＝中央一（ダックシティ丸光石巻店前）

「湊本町」＝湊町一（湊幼稚園前）

「立町」＝中央一（仙台銀行前）

「面刺田」＝清水町一（ニイスマビル前）

「九軒町」＝門脇町二（消防第三分団前）

▲昭和58年度設置▼  
「坂下町」＝門脇町二（西光寺前）

「袋谷地」＝水明南一（長林寺前）

▲昭和61年度設置▼  
「本町」＝中央一（旧中央郵便局前）

「坂下町」＝中央一（永嚴寺参道入口）

▲昭和63年度設置▼  
「田町」＝八幡町一（洋幣志神社境内）

「東町」＝漆町四（福井嘉明氏宅前）

▲平成元年度設置▼  
「裏町」＝中央一（まるみ興服商店前）

「小野寺横丁」＝立町一（梅屋分店前）



## 平成二年年度

### 文化財めぐり

平成二年度も例年どおり、三回の文化財めぐりを実施しました。

第一回文化財めぐりは、市内の歌碑・句碑を徒步でめぐった。「石巻市の歌碑・句碑をたずねて」として六月に行いました。第二回は、「中世の石巻をたずねて」と題し、稲井・漆地区の文化財めぐりました。第三回は、「芭蕉の足跡を追って」を、一月一八日実施しました。

昨年に引き続き「芭翁の足跡を追つた企画として岩手県へ足をのばし、「芭

蕉の足跡を追つて—岩手県南の文化財をたずねて」を、一月一八日実施しました。

ます。特に明治期に活躍した保原花好(ほらかこう)の句碑は数多く立っています。この文化財めぐりを機会にこうした隠された、ローカルな文化活動に関心を持つてもらえたと思います。

#### 第二回文化財めぐり

##### 中世の石巻をたずねて

月日 一月四日(日)

講師 佐藤雄一文化財保護委員

第二回文化財めぐりは、あいにくの雨

のなか、稲井・漆地区の中世の石巻にかかる文化財を見学しました。雨のためコースを変更、短縮し、市役所前を出発。

箭洞院・南境鉢輪・的場石・鶯ノ巣・高

木音堂・大坂碑群・牧山零羊崎神社を見学しました。

中世の石巻について認識を深めてもらいうことができたと思います。

#### 第三回文化財めぐり

##### 芭翁の足跡を追つて—

岩手県南の文化財をたずねて

月日 六月一〇日(日)

講師 佐藤雄一文化財保護委員

参加者 二五人

前日まで降っていた雨も朝には晴れあがり、絶好の日和となつた第一回文化財めぐりは、午前九時に住吉公園に集合し、

住吉公園内の歌碑・句碑を見学した後、

寿福寺、永嚴寺不動堂、鳥屋神社をまわり、日和山公園内の歌碑・句碑を見て、昇ぎ解説しました。

石巻市内には、江戸時代から最近まで

の歌碑・句碑等の文学碑がたくさんあり

川名祐一文化財保護委員

芭翁の足跡を追つて—

うたまくら 訪ねる車窓 つるし柿

タブキし 毛越しの寺の 池めぐる

(参加者の作品から)



▶第一回文化財めぐり(日和山)



▶第二回文化財めぐり(南境鉢輪)



▶第三回文化財めぐり(毛越寺跡)

## 文化財標柱・説明板設置事業

# 文化財を大切に

しましょう

石巻市内には、二つの国指定文化財、三つの県指定文化財、二二の市指定文化財、そして一〇〇か所余りの周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があります。

石巻市教育委員会では、こうした文化財があることをみなさんにお知らせするために、標柱や説明板を設置する事業をすすめています。これら文化財として指定・登録されている物、土地の現状を変更しようとするときは、法律や条例による届出が必要です。特に周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）で土木工事や住宅建設を計画したときは、できるだけ早く当教育委員会へ相談してください。

文化財は、保護してあたりまえのものですが、しかし、その生活と互いに調整して行わなければなりません。この調整をうまく行うためにも、それが何かの文化財・遺跡であるという標柱が建つていただき、聞いていたときは、可能な限り早く相談してください。

本年度は、標柱五本、説明板二基を設置しました。設置にあたり御協力いただき、いた関係各位にお礼申し上げます。

仁斗田貝塚の現状を変更し保存に影響を及ぼす行為を行なおうとする場合は、事前に宮城県教育委員会の許可が必要です。

平成3年3月

祝田浜の両墓制

幕と、その死者の靈をまつる參り墓とを二重にもつ、土葬による墓制です。祝田浜では、埋め墓を「參り墓（ミハカ）」、參り墓を空墓（カラハカ）と呼び、埋め墓は平石（ハラシ）参り墓は石塔（イシタケ）の碑です。旧家の阿部家（アベ）のみに伝えられ、他家は單墓制です。

この墓制は近畿地方に多く分布し、國の南北端（九州・東北地方）には実例が少なく、宮城県では祝田浜しかありません。

一般に、埋め墓は葬式のときだけ行き、あとでは參り墓だけを拝むところから、死体はけがれものだから打捨て、靈だけを拌むという古い民俗に根ざしていると思われてきました。しかし、祝田浜では、

この遺跡は、元來円墳で高さ四メートル、直徑約一五メートル程度あつたものと想われる。しかし、残存する墳丘が半壊し、変形しているため、製作年代や埋葬状況については不明である。

石巻市指定文化財 龍泉院のイチヨウウ

龍泉院境内に立つこのイチヨウウは、枝張りがよく大きく整つた樹形をもつ石巻市の代表的なイチヨウウである。雌株で根回り七・二メートル。市内で高木吉祥寺のイチヨウウに次ぐ巨樹である。晩秋には黄葉して美しい景観を見せてくれる。

石巻市指定文化財 吉祥寺イチヨウウ

この吉祥寺の山門に立つ二種のイチヨウウは、石巻市代表的なイチヨウウで、なんのなる雄株である。

それぞれの根回りは九メートルと7

メートルで、乳の垂れたような瘤のみられる北側の株は市内最大の巨樹である。

三) 年の記録には、十八棟の穀倉があつたと記されている。

鐵浜と古代の土器が出土する遺跡で、新金治遺跡

上に位置している。

## 【標柱】

### 仙台藩鶴鳴跡

藩は川村孫兵衛重吉に命じ、北上河道改築の大工事を行い、石巻に港を開き藩倉を設けた。開港後約二十一年を経た正保二年（一六四五年）この辺一帯に大規模な

江戸回米用倉庫を建設、宝曆三（一七五

図1 小竹 イッカイ櫓

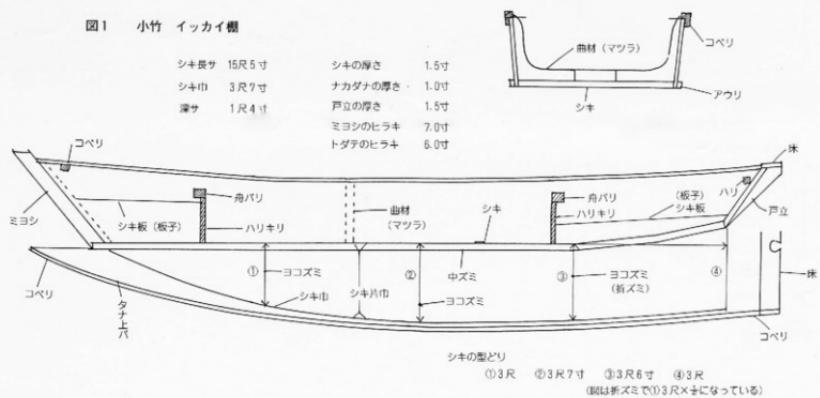
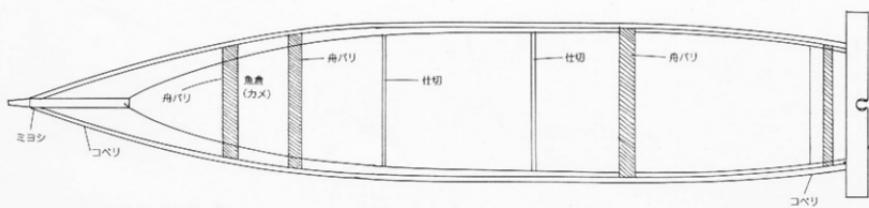
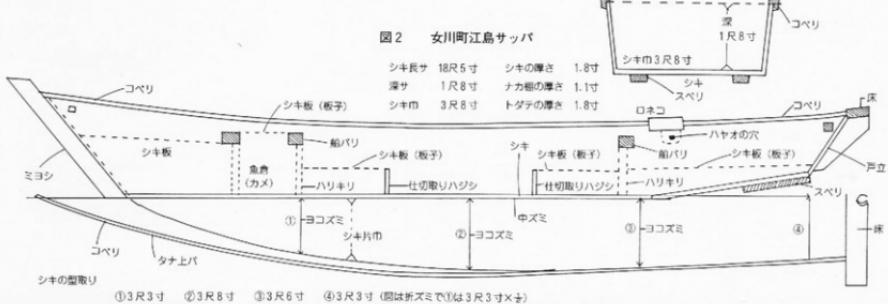


図2 女川町江島サッパ



## 石巻市文化財だより(第20号)

平成3年3月30日 印刷

平成3年3月31日 発行

発行：石巻市教育委員会

石巻市日和が丘一丁目1番1号

電話 (0225) 95-1111 内線 345

印刷：株式会社 鈴木印刷所

石巻市鶴田新谷地前121

電話 (0225) 22-4101